

第11回 蘇東坡は故郷の人々について語り尽そうとした

——其の子孫の以つて人に告げざるの過あやまちなり

2017年8月13日（日）。

「今日の日付けんとこに書いてある、7月8日のスイカってなんのこと？ 1カ月以上も前のスイカがあつたりするの？」

壁にかかっているカレンダーをのぞくイノ君に、

「それは、スイカは受粉して35日目くらいが食べごろだというので、忘れないよう書いておいたのです」

「へーえ、そつかあ。叔父さん、スイカ作ってたんだよね。それで、収穫した？」

「獲れたてをぎゅ馳走できたらいいのですが、残念ながら、もう食べてしまったのです」

「えっ、そうなの？　なんで？　今日あたりボクがくるかなって思わなかった？」

「食べたのは私ではなくて、カラスです。食べられてしまったのです。しかも、

この前の水曜日に」

「なんだあ、もうとつくにカラスにやられちゃったんだ。カラスもカレンダーに書いていたのかもね」

「袋でおおって嚴重に隠しておいたのに、ずたずたに破かれて。カラスのヤツときたら、この1回だけでなく、次々にスイカを食べて、とうとう最後の1個だったのです。みごと全滅です。だから、もうスイカは作らないと決めました。食いしん坊のカラスもさすがに唐辛子は嫌いみたいで、赤くいい色になってきても食

べようとはしないですね」

「じゃあ、来年からは、植えるのは唐辛子ばっかにしたら？」

「1本あれば十分ですよ。2年分くらい獲れますから」

「余ったらボクがもらってあげてもいいよ。唐辛子って、いろんな種類があるみたいだから、あれこれ作ってみたら」

「辛さの度合いとか、甘味があるとか香りがどうか、いろいろな唐辛子を料理によって使い分けたりするらしいですけど、わたしの味覚はそこまで敏感でないです。この前、四川料理しせんの店で、うっかり唐辛子を嚙んでしまって、一瞬で舌が麻痺して、コンクリートみたいになってしまったので、あんまり辛すぎるのも…」

「その四川料理だけど、トバー君の時代にはマーボー豆腐とかなかったんだっ

てね。知ってた？」

「唐辛子はコロンブスが新大陸で発見してから世界に広まったものなので、もしも蘇東坡がマーボー豆腐を食べていたら、織田信長が桶狭間の地図をスマホで検索するくらいおかしいことでしょうね」

「唐辛子がなければ、マーボー豆腐だけじゃなくて、タンタンメンもチンジャオロースーもホイコーローもなかったわけで、つまり、四川料理っていうのがまるつきりなかったってことだよね」

「中国語では四川料理のことを川菜チエンツァイというようにですけど」

「どっちにしても四川の郷土料理だよね。逆にいうと、四川料理を郷土料理とするところが四川なわけだ。ということは、集合、補集合の関係からして、四川料理を郷土料理としないところは四川ではないってことだよね」

「そうなりますか？」

「とすると、トーバー君の故郷には四川料理が存在しなかったんだから、そこは四川ではないので、すなわち、トーバー君は故郷をもたない人だったってことになるよね」

「どういう理屈ですか？」

「気の毒なことに、お役人なんかになるから、故郷を喪失した根無し草になっちゃったんだよ。そこいくと、ボクなんかは、生まれてからずっとこの町にいるから、故郷はどこかと聞かれたら、この町だと答えるしかないんだけどさあ、なんかそこには違和感があるんだよなあ。」

この町に郷土料理ってあったりするのかなあ？ もしかして、生シラスなま？ 目の前の海でシラスが獲れたりはするけど、実際に生シラスなんかめつたに食べな

いよなあ。この町でふだんよく食べるものはなにかといたら、この前、あの有名な通りを歩きながら、そういえばパン屋さんが多いなああって感じて、数えてみたら、5分くらい間に5軒もあつたんだ。それと、ラーメン店もいっぱいあつて、例のねずみ男の千歳飴ラーメンも入れると、同じ範囲で7軒くらいかな。これだけ多いと、わが町の郷土料理はパンとラーメンってことになったりするんじゃないの？」

「いまは日本中どこでも同じようなものを食べているんでしょうねえ。昔から伝わる郷土料理みたいなのは、むしろ特別なときに食べるものであつたりするのではないでしょうか」

「要するに、故郷っていう語感がいまの日本ではもうビミョーってことかな。『この町がイチバン！』みたいに、ヘンに誇りをもたれてもなんかチョウウザイしね」

「ビミョーとかウザイとかチョーとか、イノ君はときどき使いますが、どうなのでしょう？ それこそビミョーで、かなりやばくないですか？ そのボキヤブラリイはいまではちよつと古臭いですよね」

「そうなんだよ。ボクとしては、叔父さんに合わせて、わざと古い言葉づかいをしているつもりなんだけどなあ」

「わたしはもつと古い時代の人間ですけど」

「じゃあ、うんと古く、ありをりはべりいまそかりとか、使わないとダメかな」

「ぜひともそうしてください。イノ君が古語を駆使するのを聞いてみたいです」

「係り結びとかもちゃんと使って、やってみようかな。古文は好きじゃなかったけど、ここんところ、ちよつとそうでもなかったりしたりするから。叔父さんにはまだいってなかったけど」

「どうしました？　もしかして、トーバー君にいわれて、新井白石あらいはくせきを読んだりして
みているのですか？」

「ちっげーえよ。ボクってやばいくらいにすなおだから、これ読んだらいいよと
か勧められると、きっと一生読まなくなるんだ。夏休みの課題図書とかだつて、
1冊も読んだことがないし」

「そういえば、イノ君の読書感想文って、いつも凶鑑だったですね。凶鑑の感想
文ってなかなか書きにくいだろうに、なかなかやるなあ、个性的なすごい子だつ
て、あのころは思っていましたけど」

「あのころはね……いまはちつともすごいくないっていうのは、そうだと思うよ」
「潜在的なすごさがあると、いまでも思っていますよ。で、何か古文を読ん
でいるのですか？」

「二生、潜在のままかもね。それで、いちおう、短歌というか和歌をちょっとだけ……。潜在的な能力がそこで発揮されるってことは100パーないだろうけど」

「へーえ、和歌ですか。ちつとも知りませんでした。おもしろいですか？」

「どうか。しばらく前に、叔父さんに内緒で1冊持ち出した本があつてさ、『折々の歌』の対訳本なんだけど」

「ああ、そういうのがうちにありましたっけ。知り合いにもらつて、本箱のどつかに突っ込んで、そのままだったかも。この間、おおおかまこし大岡信さんが亡くなったので、

それで興味をもったのですか？」

「それより前なんだ。ほら、トバー君はボクのために超訳をしてくれているよね。それで、逆に、日本語を他の言語に訳したらどういうことになるのかなあつて、読んでみたんだ。それで、その本をこっそり返しておこうとしたら、同じ大

岡信さんの本で、子供向けに万葉集から江戸時代までの和歌を紹介した本が目に入って、またこっそり借りてみたんだけど、悪かったかなあ」

「わたしの本はいつでも自由に読んでいいですよ。18禁の本とか、たぶん隠したりしていないでしょうから」

「ボクも18歳は超えてるしね」

「それで興味をひいた歌とかありましたか？」

「どれっていうんじゃないけど、やたらと恋の歌がいっぱいあるのがおもしろいのかも。中学校とかで百人一首を暗記したりしたけど、改めて意味をちゃんと知ったら、こんな健全な歌を中学生に覚えさせちゃっていいんですかっていうのがあつたりするよね」

「たとえばどういのですか？」

「そうだなあ、へあいみての後に心に……、なんていうの、かなりやばくない？『あいみて』って何ですかって、しつこく聞かれたら、教室で説明しにくいでしょうに。その後で実際に気持ちが変わるのかどうか、オイラも追体験してみようとか思われても、どうなのかな」

「まあ、なんともいえませんが」

「そういう恋の歌だらけの百人一首とトバー君の詩とはゼンゼン違うよね。トバー君の時代って、日本では平安時代の摂関政治から院政のころだから、おおよっぱにいつてほしい同じなんだろうけど」

「その違いがどこから生じたのか、夏休みの自由研究として、なかなかいいテーマかも知れないですね」

「18歳をついこの間超えてしまったボクには、夏休みなんかほんのちよつとし

かないしなあ。そんなことより、もう間に合わないかもしれないけど、スイカをカラスから守る方法を研究したほうがずっと意味あると思うよ。スイカ、食べたかったなあ」

* * *

㊦ **今夜**は我が故郷眉山びざんについて語ってみたいと思っています。

前回お話したように、私は二つの棺を船に載せて、治平3（1066）年6月に都を発ちました。隋ずいの時代に造られた大運河を経由ちようごうして長江に出で、そこからは大河の流れを延々と遡り、眉山市に帰り着いたのは翌年の4月でした。

——ということは、1年近くもかかったんだ。昔の旅ってそんなに大変だったの？

㊦ 実を言うと、昔の旅としても、少し長過ぎたようです。敢えて急がず、行く先々で成り行きに任せたために、これほどの長期間になったのでした。何をしていたのかと問われますと、服喪中でありましたから、ただただ悲しみに浸っていましたがとお答えするよりありません。

——なんかあやしかったりする？ せつかくだからと、いろいろと観光とかしてたんじゃないの？

㊦ このときの私の旅からほぼ100年後に、陸游君りくゆうがやはり船で長江を溯ったときに克明な記録を残しています。陸游君は、いくらたくさんの注釈を施しても

下手な詩が下手であるのを妨げはしないと云った人です（**第2回**）。陸游の道
 りは私よりいくらか短く、各地の名所、旧跡を訪ねながらも、約5カ月間で旅を
 終えています。かつてここで蘇軾が詩を詠んだとか、ここで蘇軾は弟と別れたと
 か、しばしば私について触れてくれています。日本語の訳書（岩城秀夫訳『入蜀記』
 平凡社、1986年）もありますから、昔の船旅がどのようなものであったのか
 お知りになりたければ、そちらをそしよくご覧になって下さい。

——旅の形態って、鉄道ができたり、自動車走ったり、飛行機が飛んだりする
 ようになるまでは、長いこと、あんまり変わらなかつたんだろうね。いまから思
 うと、昔は大変だったろうってことになるんだけど、昔の人にとってはそれがあ
 たりまえだったんだよね。

㊦ 実際のところやはり大変でした。病気になったり、盗賊に遭いでもしたら実

に難儀でありました。幸いにも、私達の宋の時代は、旅のインフラも整備され、治安もよかったので、かなり安全に旅することができました。

このときの旅のちようど真ん中の頃に、都で大きな変化がありました。治平4

(1067)年1月8日、英宗皇帝えいそうが亡くなりました。皇帝には精神的に脆弱なと

ころがあり、一時期は国政の改革に意欲を示したものの、実の父の祀り方を巡って激しい政争になってしまったのを気に病み、健康を害して36歳の若さで亡くなったのです。皇帝の位にあることわずか4年足らずでした。

新たに皇帝になったのは、英宗皇帝の長男で、後に神宗皇帝しんそうと呼ばれるようになった人です。新皇帝はこのとき20歳でした。

——ん？ 父が36歳で息子が20歳？ ということは、16歳でもう子供がいたってことじゃん。高校生で父親ってことか。生物学的にはおかしくはないんだろけれど、それにしても早いよね。そういうえば、トバー君が結婚したのはいくつときだったっけ？

㊦ 19歳でした。満年齢でいうと18歳でしたから、高校生結婚ということでしょう。昔は寿命が短かったために、早くに結婚して早くに子孫を残そうという傾向が強かったのでしょう。いまの日本では晩婚化が進み、その要因の一つとして経済的な理由が挙げられますが、私などは経済的に全く自立していない段階で結婚しています。妻とはそれから11年の歳月をともにし、ことるとき

の旅で棺を船の載せて連れ帰ることになったのです。

新たに若い皇帝が即位し、これより宋は激動の時代に入って行くのですが、その時点ではまだ何も見えていませんでした。私達は変わらず旅を続け、眉山に帰ったのでした。

ところで、あなたの故郷はどこなのでしょう。

——そう聞かれると、ちよつと困るんだよなあ。生まれてからずっとこの町だから、ここが故郷ってことで、ここ以外に故郷があるわけでもなんでもないんだけど、「この町が故郷です」っていうのは、なんかちよつと違和感があったりするんだ。

なんかよくわかんないけど、たぶん、故郷に思いをはせるとか、故郷について

しみじみ語ってみたいとか、そういうのがゼンゼンないっていうのがひとつの理由かな。漢字で「故郷」って書くにしても、「古里」って書くにしても、なんか遠くからなつかしむみたいなのがあったりするじゃん。いまは職場もこの町の中にあって、ほぼ24時間ずっとここにいて、そういうこととはまるつきり関係ないよなあって感じなんだ。「どこに住んでんの？」って聞かれたら、すぐに答えられるけど、「故郷は？」っていわれると、どうもなんかあ……。

① 生まれてからずっと同じところにいられるというのは、すばらしいことなのではないでしょうか。そうしたくてもできない人だっただくさんいるわけですから。

——まあね。施設のお年寄りに聞くと、就職のために地方から出てきたっていう人がたくさんいて、ボクが「ずっとこの町なんですう」っていうと、「それはいいですねえ」っていわれたりする。なかには、故郷から遠く離れた北海道の炭鉱に連れて行かれ、めっちゃくちゃ寒いし、仕事はきついしで、大変に苦勞して、そのうち炭鉱が閉鎖になっちゃって、再雇用先を斡旋されてこの町にきたっていう人もいるんだ。そういうのを聞いたりと、たしかにボクは恵まれているのかなあと思ったりする。故郷にいたくても、過疎化で暮らしが成り立ちにくい地域もあつたりするしね。もっとシビアに、国を離れなければならない難民だつてたくさんいるわけだし……。

ボクに故郷意識がないのは、故郷を離れて苦勞した経験がないからなのかもしれないけど、それだけの理由ではないようにも思う。よくわかんないけど。



あなたの町に、昔から伝わる伝説とか民話とか、何かありますか。

——それなんだけども、ボクが思うに、その昔は、たぶんおじいちゃん、おばあちゃんから、土地に伝わる古い話を聞かされたりしたんだろうね。それで故郷意識が育まれたみたいなのもあつたりしたんだろうけど、ボクらにはそういうのがないんだよなあ。テレビのアニメで日本むかし話とかを見て育ったんで、日本中どこでも同じようだったりするのかもね。むかし話なんかよりもっとおもしろいものもたくさんあるしね。

大人になってから、実はわが町にはこんな伝承がありますよって、本かなんかで読んで、「へーえ、そうなんだ」ってことになったりもするけど、それってもう

手遅れだよ。身にしみこまないもの。

ボクも、職場の近くの道路脇に「河童徳利の里」かっぼどっくろとかつていう看板が立っているのを見て、それでこの土地にも昔話があるつていうのを知ったけど、「あっそうなんだ」つていうだけだよ。はつきりいって、河童徳利よりはネコバスのほうがなじみだもの。うちにネコバスのぬいぐるみはあったけど、河童徳利はなかったし……。

① その河童徳利とはどのような話ですか。よろしかったら聞かせていただけますか。

——ボクが話すの？　ここではボクは聞き役のはずなんだけどなあ。

うるおぼえなんで、ざっくりすじだけいうと、えーと、昔むかし、なんとかつていう人がいて、馬を飼っていて、酒が大好きだったんだ。名前は、五郎丸だったか、五郎兵衛だったか……。

ある日、川で馬を洗っていると、河童が出てきて、馬を水の中に引きずり込もうとしたんだ。大事な馬を食われたらたいへんだと、村人たちを呼び集め、みんなで河童を取り押さえて、木にしばりつけたんだね。すると、河童が「助けてくれ」と泣いて頼んだので、五郎兵衛さんはかわいそうになって、逃がしてやったんだ。すると、夜に、河童がきて、助けてもらったお礼だと、徳利を渡したんだ。それはいくらでもお酒が出てくる徳利で、だけど、底を3回たたくとそれつきり出なくなるんだ。五郎兵衛さんは大喜びで、それから、酒ばっか飲んで暮らして、馬にエサをあげることもしなくなっちゃったんだ。馬はすっかりやせ細り、

ある日、五郎丸さんはそのあわれな姿にびっくりして、徳利の底を3回たたいて酒が出ないようにし、それからまじめに働くようになったんだって。

だいたいそんな話だったと思う。

㊦ そのようなすてきな徳利があったら、「徳利奉行親爺」こと「しっぱいじお執杯持耳翁」はひどく喜び、底を3回叩くなどというもつたいないことは決してしないでしようね。

——ボクも叩かないなあ。自分で飲むんじゃないで、酒屋を開いて売ったら、もとでがゼロでどんどんもうかつちやうよ。たぶん、だれだってそうするよね。

そんなことも考えつかない五郎兵衛さんのところかよかったですりするのか

もしないけど、ボクとしては、いま話しながら、ちよつと教訓じみているところがあるのかなあつて気になった。ひたすら酒を飲んで、馬があいそをつかして逃げ、それでも飲み続けて、人生オシマイみたいなほうがリアリティがあったりしないかなあ。

㊦ そういう結末ですと、河童が恩を仇で返したということになってしまいましたか。

——それでいいんじゃないの？ 恩返しにみせかけて、五郎兵衛さんを破滅に追いやるなんて、まさに世の中は不条理だということだよな。

それと、3回たたいたらお酒が出なくなるっていう仕掛けがあるっていうのが、

なんかあやしくない？ そんな仕掛けを使って、河童は五郎丸さんを試したって
ことにならない？ いやな河童だ。

ⓧ もしかすると、もともとは、酒がいくらでも出て来る徳利を河童が持っている
るといった素朴な言い伝えだけがあったのではないのでしょうか。それが発展して
一つのまとまった話になって行った過程で、教訓的な匂いも付け加えられたので
はないでしょうか。

——教訓じみたところがあつたほうが、聞くほうとしてはなんか得心しやすかつ
たりするだろうしね。

でも、河童はどうしてそんな徳利を持っていたのかな？ 百均で売ってるわけ

じゃないだろうから、先祖から伝えられてきたのか、それとも自分で発明したのか。そんなのが作れるくらいだったら、なにも馬を川に引きずりこむなんてことをしなくても生きていけるよね。いくらでもごはん出てくる茶わんとか、いくらでもお札が出てくるATMとか作ったらいんだから。

ちよつと考えると、この話って、ツジツマの合わないことがいっぱいかも。

㊦ 昔からの伝承というものはえてしてそのようなものなのでしょう。商業作家なら十分に練って話を作り上げるのでしようけれど、どちらがより魅力的であるのか、単純には言えないのではないのでしょうか。

私の故郷にも、話として整っていない素朴な伝承がいろいろとありました。例えばこんな感じですよ。

昔むかしのこと、一頭の豚が、それは雌だったのですが、地面にじつとうずくまっていました。そしてそのままそこで死んでしまい、しばらく経つと、その場から水が湧き出し、いつしか池になりました。池はどんな日照りのときにも水が涸れることがなく、人々はその水に大変に助けられました。有難いことだと、人々は池の生みの母である豚を祀る祠を建てました。それを「猪母仏」と言います。

それだけの話です。中国で「猪」というのは「豚」のことです。豚はどこから来たのか、どうしてそこであぐまっていたのが、死んだ後になぜ泉が湧いたのか、そのあたりの説明はありません。豚が神様ではなくて仏様とされたのはなぜなのかもわかりません。よくある仏教説話なら、前の世で何かがあつて現世で豚になつて云々といった展開になるのでしょうけれど、そのようなことは何もありません。

——水の湧くところに神社とかお寺が建てられたりするってことは、日本でもよくあるよね。このあたりでいちばん大きな神社もそういうものらしいけど。

㊦ この猪母仏の祠は眉州の青神県せいしんにありました。青神県は眉山県から南に40キロほど離れたところで、そこは我が妻の故郷でした。

池はせいぜい学校のプールくらいの広さで、深さは一メートルくらいだったでしょう。そこにいつのころからか二匹の鯉こいが棲みつくようになり、誰が言い出したのか、

「鯉は死んだ豚の化身で、成長した後、猪竜ちよりゆうとなって天に昇るだろう」という話になっていました。

「猪竜」というのは、体が豚で首が竜という想像上の奇妙な動物で、安禄山あんろくざんの正体は実は猪竜だったという伝説があります。あるとき玄宗皇帝げんそうが安禄山を宮中に呼んで酒を飲ませたところ、安禄山はしたたかに酔って眠ってしまい、その寝姿をある者が覗き見ると、体が豚で首が竜の化け物になっていましたので、びっくり仰天して、安禄山を殺してしまうよう皇帝に御注進に及びました。皇帝は笑って応じなかったので、後の大反乱を防ぐことができなかつたと言う話です。

——またしても安禄山が出てきた。なんか毎回、その名を聞くような気がするんだけど。



そう言われると確かにそうかも知れません。私達宋代の人間にとって、安禄

山はどうにも気になる存在だったからでしょう。一つ前の統一王朝である唐に劣らず、できればそれ以上のことを、我々は達成したいと強く思っていましたから、最盛期にあった唐王朝を一気に衰退期に向かわせた安祿山の乱は、いわゆる「他山の石」以上に強く意識しなければならぬものであったのです。

——それって、歴史は繰り返すってことかな。中国の歴史って、王朝が替わるごとに似たような感じの栄枯盛衰のサイクルが繰り返されるような印象があるけど、違うかな？

㊦ 一つの王朝が樹立され、初代皇帝が亡くなったところに一つの不安定期を迎え、それを乗り越えると極盛期に入り、そして徐々に衰退してついには滅ぶという展

開は、毎回似たような繰り返しに見えるかも知れませんが、その一方で、貴族社会が崩壊して行くような大きな変化は、幾つもの王朝をまたがって進行しました。隋ずいの時代に始まった科挙制度の進歩に伴い、唐を経て宋の私達の時代に至って貴族は跡形もなく消え去りました。その点で唐と宋は大きく異なっています。

それはともかく、猪母仏の池の鯉は猪竜になる前にいつしか姿を消してしまつたのですが、私は結婚して間もない頃に、妻の実家を訪ねに行った折に、その池に立ち寄り、しばらく濁つた水を眺めていたところ、水面に鯉の影がふつと見えましたが、妻の実家で猪竜の噂を持ち出すと、妻の兄の王愿おうげんは腹を抱えて笑い、

「君はよほど怪奇談が好きと見えますな。猪竜に変身する鯉なんかいるはずがない。あそこに鯉がいたとしても大方誰かが食ってしまったのだ。いまどきまたそんな話を持ち出すなんてどういう気だ。変わったものを見たいという妙な思いが

あるから、自分の影か葉っぱか知らんが、鯉がいると早合点したのだろう。そのうち猪竜が昇天したのを見たとか、ネツシーが現れたとか、あわてふためいて言いに来るのではないのかい」

——ちよつとお、ネツシーって、そこんところは絶対にウソだよ。テキトーに話を作らないでよ。でも、ネツシーは恐竜時代の生き残りだから、トバー君のころにもいたって悪くはないんだけど……。でも、いまだきネツシーなんていう人はもういないよ。話をおもしろくしようとして、でもヘンに古いんだよなあ。

㊦ 義兄が猪竜の噂について軽く笑ってくれたらそれでよかったです。が、「こんなことでは妹が心配だ」みたいなことまで、ちよつと見下した感じで言い出し

たので、

「嘘か本当か実際に見て確かめてから、いくらでも笑うがいい」

義兄の腕を掴み、そのまま池へと引つ張って行きました。

池に鯉の姿はなく、それこそ静まり返ったネス湖のようでありましたから、王願は、

「それでは、大いに笑わせてもらおうかな。妹もとんだ亭主を持ったものだ」

大袈裟に笑いましたので、それをさえぎるような大きな声で、池に向かって私は叫びました。

「私は嘘を言ったのではない。鯉よ、真実を証明するために、どうかもう一度姿を見せてくれ！ もしも、私が嘘を言ったのなら、池の神よ、私を水の底に沈めてくれ！」

義兄は笑い声を止め、あきれたように私の顔を見て、

「なんの誓いだ。嘘でしたと言え、笑ってすむことではないか」

鯉は依然として姿を見せず、

「もうよい。こうするまでだ」

私は助走をつけて池に飛び込もうとしました。義兄は私の腕を掴み、

「何もそこまでしなくても」

もみあう間に、鯉がぴよこんと顔を出し、

「あっ」

と、義兄が叫びました。

——ちよつと、ちよつと。もう、ものすごくウソっぽいよ。だって、飛び込むた

って、さつき深さが一メートルくらいって言ったよね。飛び込んだってどうってことないじゃん。

㊦ 実際に鯉が姿を見せたので、義兄はあっさりと、

「鯉がいたか。疑ってすまなかった。お詫びに、家に戻って、酒宴を開こうではないか。ついては、よい肴がすぐには用意できないので、いまのあの鯉を掴まえるというのはどうかな。あやしい猪竜になる前に食べてしまうのが世のためでもあるろう」

せつかく事実であることを証明してくれた鯉を食べてしまうわけにはいかないと、私は義兄を止めました。それでその晩のこと、助けてくれたお礼だと、鯉が徳利を持って来まして……

——もう……これは完全にウソだよ。トバー君の話はどこまでホントかわからないよなあ。

㊦ 猪母仏にまつわる話をもう一つしておきましょう。

かつて青神県に朱文及しゅぶんききやうという1人の親孝行者がいました。ある夜のこと、父が急に苦しみ出し、時はすでに真夜中時分であったのですが、朱文及は医者を呼びに家を飛び出しました。

医者まででは遠く、途中で猪母仏の祠の前にまで来ますと、暗闇にぼーっと浮かぶ女性の姿がありました。

あやしいと思いはしましたが、目もくれずに通り過ぎようとしていますと、

「もうし、あなた」

と、声を掛けて来ました。冷たいぞつとするような響きに、聞こえぬ振りをして行つてしまおうとしました。ところが、足が勝手に止まり、前に進めなくなつてしまいました。

「もうし、あなた。よろしかったら、わたくしめの琴を聞いていただけませんかでしょうか。どうかこちらにお越しくださいまし」

「いえ、父が病気で、急いでお医者様を迎えに行くところなのです」

そう言つて断ろうとしたのですが、口がきけません。見ると、かたわらに立派な高殿があり、ぼーっと灯がともっています。そのようなものはいざ見かけたことがないので、朱文及はぞつと恐ろしくなりました。

「もうし、あなた。こちらへ」

女性は朱文及の手を取りました。その手は氷のように冷たく、朱文及は振り切つて逃げようとしたのですが、次の瞬間に、身はすでに高殿の内にあつて、女性が奏でる琴を聞いているのでした。

たちまち心は虚ろになり、そのまま時は移ろい、明け方近くになつた頃に、「あなたさまのおかげで今夜はとても楽しゅうございました。どうかまたお越しくださいませ」

女性に背中を押されて外に送り出されますと、急にはつと自分を取り戻し、「そうだ。医者だ、医者だ」

あわてて走り出しますと、少し行つた先で何かにつまずいてはったり倒れてしまいました。まだ暗さの残る地面をさぐると、そこにあつたのはほんのり温かみのある男の死骸でした。

びつくりして悲鳴を上げますと、近在の人々が起きてまいりまして、たちまち大騒ぎとなり、役人が来て、当然ながら、まず第一番に朱文及が疑われました。しかし、調べると、朱文及は名高い親孝行息子でありましたから、男は別の盗賊によって殺されていたのであろうということになりました。そして、朱文及の話から、猪母仏が孝行息子を盗賊の難から救ったのだということになり、人々はいっそう猪母仏を信奉するようになったのでした。

——えーと、朱文及が何もなく医者のところに行って行ったら、盗賊に襲われて殺されたのは朱文及だったかもしれないってこと？ それって、お賽銭を稼ごうと、祠の関係者が作った話だったりしない？ それとも、朱文及はとんだ食わせ者だったのかな。医者を迎えに行くのを口実に、実は色っぽい商売の女性のところ

ろに行ったとか。いい思いをして外に出ると、死骸にでつくわしたんで、とっさにわけのわかんない言い訳をして、それを人々がいいように解釈してくれて、うまくいっちゃったとか。いろいろ考えられるかも。

それで、お父さんの病気はどうなったの？ 朱文及は医者を呼びに行けなかったんだよね。

㊦ 親孝行息子の話だとされながら、父親の病気については特に言及がありません。話があちこち不完全であるのは、誰かによる作り話ではなくて、実際にあったことを反映しているからなのではないでしょうか。

——ん、どういう理屈？ 朱文及が実在の人だとしたら、キツネやタヌキに化か

されたかしんないけど、たぶん、当人の主観としてはそういうことがあったってことだったりするのかな。たとえウソをついたとしても、話しているうちにそれが真実だったって、自分では思い込んでしまっただけのこともあるだろうしね。

① それでいま思い出すのは、あなたに「遊たびの奇絶きぜつ」を話し始めた最初の頃に、


雪の夜に出会った旅人のことを申し上げ、あなたがそのときの旅人も知れないと言いました（② 第2回）。私の主観としてはそれが真実であつてもいいのではないのでしょうか。

——どう思おうと当人の自由だからね。そもそもトバー君とここで話しているのがおかしなことだしね。これって、朱文及が琴の音を聞いているようなものな

のかもね。

㊦ 雪の旅人の話をした頃の心積もりとしては、そのようないわゆる無名の人々との出会いを中心に、「遊の奇絶」を語って行くようになるのではないかと思っていました。ところが、回を重ねるうちに、つつい国の政治に触れるようなことが多くなって来てしまいました。政治の表舞台で活躍した人達は、何も私が語らなくてもいくらでも書かれたものがあります。雪の旅人は、私が記憶に留めておかなかつたならば、900年余りの時間の彼方にとくに消え去っていたはずです。私がどちらを語るべきか言うまでもありませんでしょう。ましてあなたは遠い昔の政治情勢などには何ら興味がないのですから。

——昔でなくても興味は持ちにくいんだよなあ。政治にはだれもが関係するんで、無関心でいてはいけないっていう理屈はわかるんだけど、でも、どうせ庶民はろくでもない目に遭わされるだけだもんなあつて思っちゃうんだよ。

よくさあ、大河ドラマとかで戦国時代の話とかを飽きずにやってんけど、戦争でどっちが勝つたどっちが負けたみたいなのはどうでもよくて、100パー見る気しないよなあ。いわゆる英雄がどうかしたよりも、不遇の老兵郭公かくりん（ 第2回）しよかつこうめいの方がボクにとってはずっと気になるよね。もつというと、ボクだって諸葛孔明の名前くらいなら知ってんけど、それよか五郎兵衛さんの話のほうがまだいいと思うよ。

ついでに、もつと話がずれるけど、もうすぐ敗戦の日だから、きつとまた、戦没者の尊い犠牲の上にいる日本の繁栄がある、というようなことがいわれたり

すると思うんだけど、それってホントなのかなっていつつも疑問なんだ。

戦争を知らないボクなんか、こんなことを言い出すと、きつとけしからんと怒る人がいるに違いないんで、黙っているほうがいいのはわかってんだ。戦争の犠牲になった人たちの遺族にしてみたら、せめてそのようにいってもらわないと納得しようがないというのもわかるよ。だから、遺族の方々の感情を逆なでするようなことになるのかもしれないんだけど、せめて政治に責任のある人たちは、尊い犠牲の上に云々ということはいべきではないと、ボクは思うんだ。だって、尊い犠牲の上に乗る日本の繁栄があるということが、そのままその通りであるのなら、尊い犠牲がなければいまの日本の繁栄はないってことだよ。だとしたら、尊い犠牲を生み出した戦争を起こした人たちが、いまの日本の繁栄をもたらした恩人だということになってしまいうんじやないの？ これって屁理屈だよ。だ

けど、遺族の方々の気持ちに寄り添うようなふりをしつつ、実は当時の為政者を顕彰しているってことにならない？

戦没者の尊い犠牲みたいに、風呂敷でくるっとまるめたような言葉でごまかさずに、尊い犠牲の実態を、いわゆる無名の人たちの実態を、一つでも二つでもきちんと見ることが大切なんじゃないかとボクは思うんだ。ジョン・クレアが傷痕軍人のことを詠んだ詩について話したよね **（第3回）**。そういううちっぱけなこと
がホントは大事だと思うんだ。

それで、ちょうどジョン・クレアが出てきたので、今夜もここらでボクの義務を果たしておこうかと思う。

毛刈りための檻の中へ 彼等は 羊たちを帰らせる。

あるいは、脱穀のための納屋の床へと。——ここでは

歌や笑いや物語の切れ端でもって、彼等は年ごとの

労苦を和らげる。するうち楽しみなビールがまわされ

年老いた男たちの心を弾ませ、彼等は誉めちぎる。

昔の農民の いまは擦り切れてしまった様々の習慣を。

(森松健介訳、258ページ)

これは『羊飼いの暦』という、農民の暮らしを1月から12月まで順に詠んだ詩集の6月のごく一部分で、労働の合間に「物語の切れ端」や「昔の農民の習慣」を語り合うという情景なんだ。そんなときに、たぶん河童徳利とか豚の泉とか、そんな感じのこともたぶん語られたんだろうね。

そういうときに、五郎兵衛さんを語っていた人には、自分と五郎兵衛さんがどこかでつながっているって感じがあったんじゃないのかなあ。「いまは擦り切れてしまった様々の習慣」っていうけど、擦り切れてもどこかでつながっているって感じがあったんじゃないのかなあ。だから語ったんだよね。だから聴いたんだよね。いまは五郎兵衛さんの話をする人も聞く人も、つながりをとくに感じることはなくて、こんな話もありましたってことだけなんだよなあ。

① そのようなことが、あなたが故郷を意識しにくいと言われたことと関係しているのでしょうか。

——五郎兵衛さんとボクの間にもしもつながりがあるとしたら、たまたま河童徳

利の伝承があるのと同じ行政区域内にボクが生まれてからずっと住んでいてことだけだよ。それだと、隣の市の話だったらもう関係ないってことになっちゃうよ。それって意味がないよなあ。故郷とそれ以外って、間に簡単に一本の線を引くのってどうなんだろう？

トバー君から聞く古い中国の話なんか、それこそまるっきり関係ないってことなんだけど、なんかそれもどうかなあって思うんだ。ボクの叔父さんは、古いことにはぶっか関心があって、中国とか日本の古典の話をしたがるんだけど、ボクって素直だから、叔父さんにいわれるとまるっきり読む気がなくなってしまうんだけど、ホントいうとそうでもなかったりすることも。もっというのと、人間の歴史どころでない動物とか植物の進化の話なら、こどものころから好きだったしね。たぶん5億年前のアノマロカリスとボクだって、五郎兵衛さんと同じ

くらいにつながりがあるような気がする……ごめん、なにをいつてんのか、ここんところは自分でもわかんないけど。

㊦ 私は両親の影響を受けて史書を好んで読み、史書に書かれた遠い昔の人達と自分にはどのような関わりがあるのだろうかと、子どもの頃から考えていました。結論を言えば、全ての人がそれぞれにどこかで関わりがあると说着いていいと思います。人生で経験する様々な場面において、先人達の経験と重なり合うことが必ずあるということです。たくさん先人を知っていれば、それだけ重なり合う機会が多くなり、それによって自分の人生をより豊かにできる可能性が増します。私はそうした先人との重なりを感じた瞬間を詩に詠むことが多くあり、もとの史実を知らない人にとっては難解な詩となっています。あなたがもしも、ふと五郎

兵衛さんのことを思つて詩の中に織り込んだりしたならば、後世の人のためには河童徳利について注を施さないとならないでしょう。

——せっかく注を付けてもらつてもボクの詩の下手さを妨げるものではないけどね。

㊦ 五郎兵衛や朱文及の話は史書に記録されていません。史書というものは、あなたが興味を持ってないとおっしゃっていた英雄達の方にたくさん字数を費やしています。史書には、皇帝から兵士、農民に至るまでそれこそ無数と言つていい人々が登場しますが、歴史を記録する人々が、書き記す意味がある何らかの判断をした人達だけが記録されます。そのような判断の対象外である五郎兵衛や朱

文及も、庶民には聞きたいと思う心があるのでしょう。郭繪もそうです。あなたから五郎兵衛について伺った今夜のこの機会から、この場では、史書に名を残したような人よりも、消え去った人をより多く語って行くようにしたいと思います。

——まあそれでもいいんだけど、そんなふうに決めなくても、テキストにやってくれていいと思うよ。どうせ酒を飲んでの気楽な話なんだから、ルールでしぼるようなことはなくていいんじゃないの。むずかしいつまらない話をし出したら、聞いているふりしてねちやうから、気にしないで。そういうのって、ボクは漢文の授業以来得意だから。

ト

話を私の船旅に戻しますと、郷里に向かう船は、治平4（1066）年4月の

初め、長江上流の岷江びんこうの流れを溯さかのぼって、妻の生まれ故郷、青神県へと入って行き
ました。

7年前の10月、都に上って官職に就くために、私は妻を伴ってこの流れを下
りました。まさかそのとき、これでもう二度と故郷を見ることはない、妻が想
像したということはたぶんなかったでありましょう。都に出て何があるのかわか
りませんから、ある種の覚悟はしたということはあつたかも知れませんが、それ
でも自分は今もう帰って来ることはない、と真剣に考えたりはしなかったでしょう。
7年前には生まれたばかりだった息子に向かって私は言いました。

「君の母にとって懐かしいこの風光を、母に代わってよく見ておきなさい」

息子は終日、舳しゅに座まって兩岸の景色を見続けていました。

翌日、船が進むにつれ、蟆頤山ばくい、象耳山せうじ、石頭山せきとう、醴泉山れいせんといった昔馴染みの

山々が次々に見えて来ました。ひきがえるのあご、ぞうのみみ、いしのあたまといった、それぞれに特徴を持った山々に囲まれたところが、我が故郷の眉山県です。

青神県を過ぎてしばらくの間は川の左右に山が迫り、ごく細長い平地がところどころにあるだけでしたが、蟆頤山の下にまで来ると、川の西側に平らな土地が広がって、豊かな田園風景が開けました。山に囲まれた盆地状の平地はよく耕され、しばしば桃源郷ユートピアにたとえられました。

蟆頤山の上に小さな四阿あずまやが置かれ、眼下に川を臨む景色がすばらしく、行楽の場となっていました。私も何度かそこに登ったものです。このときすでに田植えが終わり、蓮が葉を広げ、桑が枝を伸ばし、蜜柑の花が香るといふ、眉山県でも最もよい季節になっていました。下から蟆頤山を見上げつつ、私は山上から臨ん

だ桃源郷の景色を思い浮かべました。官職に就いて何か苦しいことがあるたびに帰りたいと思い、実際に夢にまで見た故郷にいまこの身を置いていることに、万感迫るものがありました。

帰郷したいと願ったとはいえ、このようにして帰るのを望んだのではもちろんありませんでした。7年前に郷里を発つたとき、父は都に生活の基盤をすっかり移すべく身辺整理をしました。それでも、郷里に最後まで帰らないと決めたわけではなかったと思います。

父は27歳で学問に目覚めるまでに幾度も放浪の旅に出て、学問を始めてからも科挙や制科を受けるたびに大旅行をして、広い中国を縦横に歩き回っていました。そして、天下に我が名を轟かせたいという強い願望を抱いていました。それでも、この小さな桃源郷が自分の郷里であることを常に意識していました。

私は息子に言いました。

「ここが君の故郷だ。いま君にここを懐かしいと思う心はないだろう。それでも、このこの風光があるから、君はこうしてここにいるのだということを中心に刻み込んでほしい」

眉山県の人々、そして我が一族は、広い天下の中で、この小さな場所を、自分達に与えられた真にかけがいのない場所として暮らして来ました。この土地において、人が生まれて人が死ぬという無数の繰り返しが為された末に、自分の生命があるということを少しでも息子に意識してもらいたいと思いました。

——トバー君がいつてることの意味はよくわかるけど、息子さんにとっては、実質的に初めて見る土地だよね。そこが故郷だと、実感を伴って思うのは、ボク

が故郷意識を持ちにくいというのはまたゼンゼン違う意味で、もっと難しいよな気がする。

やっぱり、故郷ってなんなのか、よくわかんないよなあ。故郷というものを意識しないといけないんだろうか？ ボクはこの町にずっといるから、意識しようがしまいが、そんなの関係なしにとにかく故郷にいて、きっと故郷から何かしら影響を受けているに違いないんだけど、その実感がないんだ。自分でもよくわかんないんで、説明しにくいんだけど。

Ⓣ 船は町の南方にある船着き場に至り、父と妻の棺を最初に降ろし、荷車を借り、人を雇って、私と弟がそれを元の家へと運びました。その他のこまごまとした荷は、後に馬正卿を残して任せました。

はせいけい

船着き場の近くには、いくつもの蓮の池があり、まだ若い蓮の葉の淡い香りがあたりに立ち込めていました。

7年ぶりの故郷の土をゆっくりと踏みしめつつしばらく行くと、親類の者達が迎えに来てくれました。先頭に立つのは従兄弟の蘇不欺^{そふぎ}、蘇不疑^{そふぎ}、蘇不危^{そふぎ}でした。

5年前に亡くなった伯父の蘇渙^{そかん}の3人息子です。従兄弟同士5人が久しぶりに顔を合わせ、短い挨拶を交わすと、互いに心の内を思いやってか、続く言葉に困り、口をつぐんで黙々と歩むということになりました。妻と父を亡くした私に向かって何を話していいかわからなかったでしょうし、伯父の3人息子は科挙に合格しておらず、いつか雄飛すべく故郷において苦しい努力を重ねているところでしたので、こちらからは話かけにくいものがありました。息子は気まずい雰囲気を感じたのでしょう、次第に後ろに下がり、最後尾から母の棺を見守るようにして、

とぼとぼとついて来るのでした。

重い沈黙がそのまま固定されてしまうのを私は嫌い、蓮の池から離れてやや高い野辺にさしかかったところで、立ち止まって振り返り、皆に向かつて言いました。

「あれはここらであつたのではないでしようか。伯父上が合格され、都からの荷が届いたときに、お祖父様じいさまが人々とともに楽しく歌っておられたのは」

従兄弟達はまわりを見て、

「荷が町へと運ばれて来る道筋に当たる野というと、なるほど、ここらでありますようか」

「数えればそれはいまから43年前のことでした。お祖父様は、野において、誰彼となく集い来る者に囲まれてお酒を飲むのを何よりの楽しみとしていました。

この土地の人々にこの上なく好かれたお祖父様がいてくれたお蔭で、いま我等は誰からも後ろ指をさされるようなことなく、こうしてこの道を歩くことができています。子孫のために、我等もまたお祖父様のようでありたいものです。落ち着いたら、是非ともここで酒宴を開きましょう」

3人の従兄弟は少しばかり顔を緩め、弟は、

「当時のことはただ話に聞くだけですが、私が高く腕を突き上げ、肉の塊を振り回しつつ高らかに歌ってこの道を歩いて行きましたなら、さぞかしたくさんの人々が町から見物にあふれ出て来ましよう」

そう言つて、腕をぐるぐるとまわし、実際に歌い出したので、私はことさらに大きく笑つたのでした。

「イカのからまる竹串、重ねて焼いた日、

夢多かりしあの頃の、思い出をたどれば、

——ちよつと、ちよつと、イカを振り回して、妙な替え歌で、ひとりでゲラゲラ笑って……なんの真似？　ほかのお客さんがへんな目で見えるから、もう、やめてよ。なんのことやらさっぱりわからないんですけど。

① 手元に肉がなかったの、イカで間に合わせただけなのですが、普段は生真面目な弟が、滑稽な仕草をしてみせたので、従兄弟達も笑ってくれましたし、息子は遠くから目を丸くして見つめていました。

弟は誰よりも背が高く、腕を振り上げると非常に目立ちましたので、そのまま

続けて歌いながら歩いて行ったなら、本当に町から見物人があふれ出たことでありましょう。

後ろ指をさされるようなことがないと言ったのは、我が母の実家の程の家を意識してのことです。我が姉が程の家に嫁ぎ、虐待されて死んだことから、我が父が、程の家は不道德極まると激烈に非難したことは前にお話しました（[第2回](#)）。それ以来、程の家にはいくら財産があっても、眉山県の人々は相手にしなくなっていました。

43年前に遡って話を整理しますと、我が蘇の家では伯父の渙が初めて科挙に合格したのですが、程の家では早くから合格者を出し、それに伴って家も裕福しゆんになっていました。伯父が都での試験に臨んだとき、程の家からも濬しゆんが受験をしていました。濬は我が母の兄です。そのときはまだ父と結婚するよりも前で、程の

家の人達の中には、蘇の家から合格者が出るはずがないと、あからさまに見下すような態度をとる者がたくさんいました。

都から伯父が合格したとの知らせが我が家に届きますと、それとほとんど同時に程の家から人が来て、ひどく慇懃な感じで、

「このたびはまことにおめでとうございます。私どもの家にも、たまたま今回一緒に合格した者が出ました。私どもではもうとつくに慣れていることではありますけれど、こちらさまでは合格祝いのお支度はいかなさるおつもりかと、私どもの主人が尋ねてまいれとのことで伺った次第にございます。当方では合格の報せが必ずあるものと、すでに用意をすませて待つておりましたが、どうやらこちらさまではそういうご様子はなさそうにございます。準備には時間もさるごとながら、かなりの費用もかかるものでございます。もしもこちらでお手伝いで

きますようなことがありましたら、どうぞどうぞ遠慮なくおっしゃって下さいまし」

その者がにたりと笑いましたので、本当の親切心から来たのではないことは明らかでありましたから、祖父はことさらにのんびりとした口調で、

「合格ちゅうもんは、息子が一人でしかしたことありますからなあ。祝いごとかいうもんが必要なら、そいつも息子が一人でやるこつてしよう。そんなことで親に面倒をかけさせる気は毛頭ありませんまい。わしは、ただわしのことをするだけですな」

そう言つて、いつものように野辺の酒宴に繰り出して行きました。

科挙に合格した者は、官職に就く前に一度帰郷し、郷里の人々の盛大な祝福を受けるのが通例で、祝賀の宴において、合格者は立派な官服を身に纏い、官員に

ふさわしい調度品をかたわらに置いて、衆人の祝賀を受けるというのがよくあるやり方で、それには相応の費用がかかります。大勢の人を祝宴に招けばその費用もかかります。程の家では、我が家との格の違いを見せつけようというのでしよう、ことさらに祝賀会を大々的に行うべくこれ見よがしに準備を進めたのでした。ちなみに、私達兄弟の場合は、合格と同時に母が亡くなって帰郷したので、そのような祝賀会のようなものは催しませんでした。

祖父は、程の家が何をしようとする無関心を装い、一切の準備をしませんでした。もしも程の家と張り合おうとしてもそれはもとより無理な話でした。

そうしたある日のこと、いつものように祖父が野辺で人々とわいわい飲んでみますと、大きな荷を積んだ馬車がごろごろと傍らを通りかかりました。それを見るなり、祖父はぬっと立ち、ふらふらと車の前に出て、

「おのおの方は、これよりどちらに行かれるのであろうかな。きっと、この親爺のところであろうて」

荷を引く人達が、近頃科擧に合格した蘇の家に行くところだと答えると、酒飲み仲間が一斉に、

「ほら、親爺さんの言った通りだ。ごっつい荷だけんど、一体何を運んで来たのかな」

立ち上がった荷車を囲みますと、

「見るまでもない。これはせがれのものだ」

まさしくそれは伯父が自分の帰郷に先立って送って来た物で、祝賀の宴に必要な品々であったのです。

祖父は、食い残しの肉の塊を手に掴むと、驢馬にまたがり、

「我が家にこの荷を持って行き、もう一度皆で盛大に飲み直そう」

町には先に人が走り、肉を持った腕を振り回し、大きな声で歌いながら、一団を率いてやって来る祖父の姿を、大勢が笑いころげながら出迎えたのでした。

祖父は堅苦しいことが大嫌いで、酔うと、頭に載せた冠を取り外す癖がありました。頭に何もかぶらないのは、昔の中国では大変な不作法であるということでした。以前にお話したと思います。だからこそはずしてしまいましたかっただけでしょう。それでも全く何もないというわけにはいかないと、指先くらいのごく小さな布きれを、おまじないのように髪に付け、一応の体裁を取り繕うようにしていました。そのときもやはり頭には小さな布きれしかなかったので、祖父の姿をより滑稽なものにしてみました。

かなり身最前の自慢話ながらも、このときから眉山県において、我が祖父が人々

から最も敬愛される人物となったのでした。そうしたことから、程の家ではそれまでの態度を改め、3年後に我が父と程濬の妹との婚姻が結ばれるということになったのです。

——それはそれでいいんだけど、科挙に合格すると社会的地位が急に高くなるんだよね。そんな家同士が姻戚関係を結ぶっていうのは、いかにもありそうなことだけど、なんかちよつといやらしいなあって、ボクなんか感じちやうな。お祖父さんは素朴な人だったらしいけど、そういうところの計算はやっぱりしっかりしてたのかな。

ト

蘇の家は代々商人でありましたから、損得勘定は当然得意としていたはずで

す。ただそれが全てであってはいけないと知っていたからこそ、祖父は野辺の酒盛りを好み、喜んでたくさんの人々が参加してくれていたのでしょう。程の家と姻戚関係になることでの祖父の一番の計算は、恐らく、豊かな才能を持った孫が生まれ出るというところにあったのではないのでしょうか。

——ん？ 「ないでしょうか」って、笑いながらいったけど、それって要するに自慢じゃん。トバー君のDNAはそうやってできあがったってことだね。

㊦ 祖父の思い出話で、伯父の3人息子と私達兄弟には同じ血が流れていることが再確認でき、それからは話がはずむようになりました。

談笑しつつ町に入る城門が見えるところにまで来て、私はふと思立ち、少し

ばかり回り道をし、小さな林を目指しました。従兄弟達はすぐに私の意図を察し、
「孝悌の心、油然と生ずべし——これこそが、我等の世代に至って、最も忘れて
はならないことでありましょう」

林の傍らには父が建てた小さな建物、「族譜亭」がありました。父は7年前に都
を向かう前に、蘇の一族の系図に当たる「蘇氏族譜」を作成して「族譜亭」に納
め、100人ばかりの親類に向かってこのように言ったのでした。

かつて我が一族の風俗は美しいものでありました。私が子供のころは、もしも不
義を為す者を見たならば、一族全員が憎み、化け物でも見てしまったかのように
心がやすらかでなくなりました。その後、その風俗はやや衰えましたけれども、
不義を為す者を見れば軽蔑して笑ったものです。しかしいまは不義を為す者を見

ても何とも思わなくなっていました。そのように我らの風俗を変えてしまったのは他ならぬあの人物です。

あの人物は人の上に立つような者であるのに、我が郷里の風俗を大いに乱しました。あの人物は速やかに人々を不義へと誘い、深く深く我らオレたちを害ガイしました。あの人物には肉親の情というものがなく、その兄の子が孤児となったのを憐れまずに棄てて顧みませんでした。あの人物には兄弟助け合う心がなく、先祖の財産を孤児に分け与えませんでした。あの人物には節度がなく、孤児が訴訟を起こすとそれを打ち砕きました。あの人物には倫理観がなく、妾を愛して正妻の上に置き、息子ともに声色にふけて、家の中の秩序を滅茶苦茶にしました。あの人物は飽くことなく財産を求め、富むことが賢さの証であるとして、廉恥というものを消し去ってしまいました。

これらのことは我が一族は大いに恥じてとても許容できないものであったのに、いまでは『あの人もやっているのだから』と我が郷里の人々全体を惑わすまでになっ
ています。あの人物は高い地位にあって力があり、我が郷里ばかりでなく、
もっと広い地域を惑わし、巧みな言葉で飾ってごまかし、人々を欺いています。
あの人物はまことは大盗賊であります。私は皆に向かってこのことを言わずには
いられません。あの人物を見て我が身の戒めとして、決してあの人物と付き合っ
てはならないのです。

——ああ、思い出した。この演説は前に聞かせてもらったよね（第2回）。「あ
の人物」というのはトバー君のお姉さんを虐待した向こうの家のお父さんのこ
とだよ。それがつまり伯父さんと同時に合格した人だったんだ。

㊦ そういうことです。

「私は父と妻の棺を「族譜亭」の前に並べ、2人の無言の帰郷を先祖に報告し、父がどのような思いでこの「族譜亭」を建て、都に向かったのか、改めて思いを巡らせました。

「族譜」とは一族の系列が一覧できる図表です。父が作成した「蘇氏族譜」は、現存する「族譜」としては欧陽脩おうえいしゅうが作成した「欧陽氏族譜」とともに最も古いものとされています。「蘇氏族譜」は、6段に区切られた表で、1段目に、父が調べた中では亡くなった日付がはっきりとわかる最も古い先祖の蘇斬そきんの名が置かれ、2段目にその5人の息子の名が並べられ、3段目にそのまた息子の名が並べられ、順に5世代下の子孫に及びます。5世代下とはすなわち私の世代です。ただし、

「蘇氏族譜」に私と弟の名はなく、伯父の3人息子等24人の名が記されています。1段目には蘇斬ただ1人であったのが6段目では24人となって、それだけ子孫が増えたということが一目でわかります。

ここでひとこと断っておきますと、24人というのは男子だけです。一覧表において女性は、例えば蘇斬がどの家から嫁を迎えたのかということではしか登場しません。

——それって、男系社会においては、男子にしか関心がなかったってことだね。ボクなんかは当然ひとかけらも勘定に入れられないだろうなあ。



父は、蘇斬から自分へとつながる男子直系の系列を特別視し、その系列の

人々には、官に仕えたか仕えなかったか、誰を娶ったか、享年は幾つか、命日はいつかという四つのデータを付記しました。

その系列を順に言いますと、蘇軾は官に仕えず、黄氏こうを娶り、享年は不明、7月26日に亡くなりました。蘇軾には5人の息子がいて、5番目を蘇祐そごと言い、官に仕えず、李氏りを娶り、享年は54、7月30日に亡くなりました。蘇祐には6人の息子がいて、4番目を蘇杲そこうと言い、官に仕えず、宋氏そうを娶り、享年は51、6月8日に亡くなりました。蘇杲には蘇序そじょという息子がいて、官に仕え、大理評事の地位に至り、史氏しを娶り、享年は75、5月11日に亡くなりました。蘇序には3人の息子がいて、上から蘇澹そたん、蘇渙そかん、蘇洵そじゆんと言い、蘇洵がすなわち我が父です。

私の祖父である蘇序が官に仕えて大理評事に至ったというのは、誤解を与える

といけないので説明しておきますと、実際に官職に就いて仕事をしたわけではありません。伯父の蘇渙が官員になったことから、祖父が亡くなったときに名譽職として追贈されたのでした。

この「蘇氏族譜」を作ったときに、父は次のような序文を書きました。

「蘇氏族譜」は蘇氏の一族の一覽表である。

蘇氏は遠く五帝の高陽氏こうようから出て、広く天下に数を増した。唐の神童年間の初めに、蘇味道そみじやうが眉州の知事となり、そのまま亡くなり、一人の子が眉州に留まった。

眉州の蘇氏はそこから始まったのである。「族譜」が蘇味道にまで溯らなかつたのは、肉親としての縁がその途中で尽きたからである。

我が一族の者がこの「族譜」を見るならば、必ずや、親を敬う「孝」と、兄弟親

しむ「悌」の情がきつと湧き上がって来るであろう。孝悌の情は肉親の関係の深さから生まれ、肉親の関係の深さは服喪のときの形に表れ出る。服喪には最も長い衰すいから最も短い緦しま麻までの五段階があり、その次には喪に服することがなくなるということになる。服喪がなくなるところで肉親の縁が尽きたということになる。縁が尽きれば情も尽き、情が尽きれば、喜びごとがあっても祝賀することはなく、不幸があっても弔問に行くことはなくなる。そうなるともはや道ですれ違ちがうだけの人と変わらなくなる。

私達が道ですれ違ちがってただそれだけと見る人も、その昔に溯ると実は兄弟であったのかも知れない。兄弟であればその初めは一人である。悲しいことに、一人の身から分かれて道ですれ違ちがうだけの人となるのである。

私はなぜ「族譜」を作ったのか。分かれて道にすれ違ちがうだけの人になるのは自然

の勢いによるものである。勢いは私にはどうすることもできない。幸いにもまだ道ですれ違うだけの人になっていないのなら、なおざりにして忘れてしまうようなことがないよう努めることができるだろう。我が「族譜」を見るとときにはどうか孝悌の情を心に湧かしてほしい。

ここに一つの詩を書き添える。

吾が父の子、

いまそれは我が兄弟。

吾が身が病めば、

兄弟も安らかではない。

数世代の後に、

兄の子孫も、吾が子孫も、

いかなる人であるかを互いに知らないようになる。

誰が死のうが、誰が生まれようが、

悲しみも喜びもない。

兄弟の親しみが、

足のごとく手のごとくの間柄であるのは、

なんとわずかなときでしかないのに、

兄弟にして不和の者がいるのは、

いったいどういう心なのか。

「孝悌の情を心に湧かしてほしい(孝悌の心、油然而生ずべし)」との父の言葉を、

伯父の3兄弟と私達兄弟は「族譜亭」の前で改めて噛みしめたのです。

——一族は親しむように、そして程の家のような不道德な連中とは付き合うなどというのがお父さんの考えだったんだ。筋道をきっちり付けるといふか、系図をまとめるようなときにも、何か理屈を通さずにはいられなかったんだ。お父さんはそういう人だったんだね。

男系主義にこだわるようにけど、「一人の身から分かれて道ですれ違うだけの人となる」というのは、正確には「二人の身から分かれて」だよ。ボクは、子どもにこんな計算をしたことがあるんだ。子には父親と母親がいるよね。その父親にも父と母がいて、母親にも父と母がいるから、子には祖父、祖母が全部で4人いるってことだよ。その1世代前になると8人、その前は16人、その

前は32人、そして64人。2倍ずつ増えていくから、128人、256人、512人、1024人、2048人、4096人、8192人、1万6384人、3万2768人、6万5536人、13万1072人、26万2144人、52万4288人、104万8576人、209万7152人、419万4304人、838万8608人、1677万7216人、3355万4432人……えーと、ここまでで何回掛け算したかわかんないけど、江戸時代でも人口は3000万人くらいで、それより昔はもっと少なかったらしいから、昔にさかのぼると、日本列島はボクの先祖であふれちゃうというか、数が足りなくなっちゃうんだよね。これってなんかおかしくない？



先祖が重複するというか、交差しているということなのでしょう。逆に昔か

ら今に向かつて下ると、2から始まってどんどん増えて行くけれど、どこかで途切れることもあるので、それで辻褄が合うのでしよう。

——現生人類はアフリカから出てきたわけだから、それこそトバー君とボクだって、アジアの方にやってきた集団のなかでは兄弟だったのかもしれないよね。

トバー君のお父さんは、一族の人々に対して仲よくするよう呼びかけたわけだけど、もっと広くすべての人々に訴えてほしいかも。人種差別とか民族差別とかヘイトとか、いったいなんなんだろうね。アフリカを出たときにはみんな兄弟で、差別の根なんかどこにもなかったのにさ。

①

父はさすがにアフリカにまでは溯りませんでした。蘇を姓とする者の先祖

は、遠く伝説の五帝時代の高陽にまで遡れると序文に書きました。そして、「蘇氏族譜」の後書きでは、高陽の5代後に昆吾こんごという者がいて、それから約2000年で自分に至ると計算しています。その2000年間に史書に名を見出すことができるのは唐の則天武后の時代に宰相になった蘇味道の前に6人だけであったと書いています。

そして、後書きに、父は自分の父親から聞いたことを書き込みました。前回、新井白石を羨ましく思うと私は言いました。自身の父親の私的なエピソードを書き残したからです。我が父は「族譜」の後書きにおいてそれを少しばかり果たしています。そのところも聞いていただきましょうか。「吾が先子せんし」と言っているのが我が父の父、つまり私の祖父である蘇序です。野辺に酒宴を好んだ人です。

t

吾が先子はかつてこう言った。

「私は年少のころに父を喪い、父より以前のことはわずかしか聞くことができなかつた。聞けたのは次のようなことだ。

眉州に移つて来た蘇氏はいつしか眉山に住まうようになった。四代前に蘇涇そけいという人がいたということだが、その子の蘇鉞からであればいくらかわかることがある。

蘇鉞は男伊達として郷里の間で知られていた。黄氏を嫁に迎え、五人の息子が生まれ、一番下の蘇祐あいていが最も賢く、才覚があり、機敏せそうであると称えられた。蘇鉞は唐の最後の皇帝の哀帝の天祐年間に生まれ、周の世宗皇帝の顯徳五年に亡くなつた。つまり唐が終わつてから五つの王朝が交替するのを全て見たのである。

蘇軾が死んで一年で宋の太祖たいそが皇帝になった。我が眉山の属する蜀では、そのときまで王氏、孟氏が相継いで皇帝を称していた。蜀人で才能があつて氣骨のある者は、王氏や孟氏の政権には仕えなかつた。『その統治は力を貸すに値しない』と言うのがその理由だつた。王氏や孟氏に仕えたのは軽薄な連中ばかりだつたから、王氏も孟氏も減びずにはいられなかつた。宋の世に至つてもまだ我が先祖で世に出る者はいなかつた。

我が祖父の蘇祐は李氏を嫁に迎えた。李の家は唐の皇族の子孫であつたらしく、祖母は非常に嚴格であつた。祖父には五人の息子がいて、上の三人は特に可もなく不可もなくで、一番下の子は軽はずみで困り者だつた。四番目が我が父の蘇杲で、善を好み、父母に仕えてまことに孝行であつた。兄弟を愛し、友人に信頼され、郷里の人々皆に好かれた。

我が父は宋氏を娶った。我が母は目上には慎んで仕え、下の者は厳しく指導した。父母には九人の子があつたが、いま生きてゐる私だけだ。

父は生業に勤め、余財を残した。蜀の地が宋王朝の版図に組み込まれたとき、多くの者が財産を擲つてその筋に取り入つて、宋朝に仕える道を得ようと我勝ちに争つた。父は『吾が子に迷惑をかけるようになってはいけない』と、そのようなことはしなかつた。農地は二頃に満たず、家屋は手狭で、屋根も瓦を載せるようなまともなものではなかつた。それなのに、人に施しをするのを好んだ。

父は言つていた。

『財があるのに施しをしなかつたら、人がわしのことをどう言ふかわからないし、どういふことをわしにするかもわからない。わしが施しをして、もしもそれを人に知らせるようなことしたら、人はわしが自分の名を売りたいと思つてゐると考

えるだろう』

だから、父は施しをしてもそれが人に知られるのを嫌った。

あるとき一族のある者が罪を犯し、牢獄に入れられることになった。その者が父にこう言った。

『俺が獄に入れられ、そして死ぬようになったら、妻子のことは君に頼むしかない。俺の罰がどれほどの重さなのか、わかったら教えてくれ。軽いようだったら、

獄に肉を差し入れてくれ。重いようだったら菜を差し入れてくれ。菜の差し入れを見たら、それからは何も食わないで死んでしまうつもりだ』

結果としてその者は釈放され、獄から出ると、父に向かって、

『俺には兄弟などが無い。我が命を託すのは君だけだ』

と言った。そしてその者が死ぬと、その母は父の手を執り、

『あなたは私の息子の兄弟だ』

と言ったので、父は答えた。

『まともな人間であれば兄弟でなくても私は付き合いますし、まともな人間でなければ兄弟であっても付き合いません。命を託すとかではなく、よく教え導き合うことが大事なのです』

父は淳化五年に亡くなった。享年から計算すると、晋王朝の開運元年に生まれたのだろう』

以上が吾が先子から聞いたことである。

——えーと、ボーつと聞いていたら、わかんなくなっちゃんだけど、いまの話は、トバー君のお父さんが、そのまたお父さんから聞いた話なんだから、その中で

父といってたのは、トーパー君のお祖父さんのお父さん、つまり曾祖父のことだよね。

㊦ そうです。51歳で亡くなった蘇杲です。そして、この後に、祖父について書いています。

吾が先子いみなは諱あざなは序、字は仲先、開宝六年に生まれ、慶曆七年に亡くなった。史氏を娶り、三人の息子がいて、上から蘇澹、蘇渙、蘇洵で、蘇洵がすなわち私だ。

吾が先子は若くに父を亡くし、喜んで善を為したけれど、書物を読むのは好まなかった。後に詩を詠むようになり、自分の思いをそこに込めるようになった。詩は即興であつという間にできた。数十年間に数千篇にもなった。上は朝廷や郡政

に関わることから、下は郷里の子供等が魚を獲り獸を獲る様に至るまで何でも詩にした。その詩は巧みとはいえなかったが、事の表側にあるものも裏側にあるものもよく見抜いていた。先子には並々ならぬ人物であると思わせるところがあつた。

先子の性格はすばつとしていて、威張ったところがなく、自分のためよりも、人のためにたくさんのことをした。人との交わりでは、身分の高い人も低い人も、皆が喜んだ。士大夫しだいふを見ると身を曲げて礼儀を尽したので、人は諂たっているのではないかと見た。ところが、田野で老農夫を見ると、やはり全く同じように身を曲げて礼儀を尽した。そうと知れてからは、吾が先子の振る舞いを怪しむ者はいなくなつた。

外から見たただけでは先子の礼儀の示し方は同じであるのだけれど、心の内では、

重んじるべき人とそうではない人との軽重の判断をしていた。

郷里にあって馬に乗ることはなく、

『わしよりも老いた者が歩いていて、わしが馬に乗っていたら、顔を合わせて面目がない』

と言っていた。

よれよれの着物をまとい、粗末なものを食べ、恥ずかしいと思わなかった。努めて多くの人嫌うようなところに我が身を置いた。『老子』を学んだわけではないけれど、自ずと『老子』の精神に合致していたのだろう。

家に居て家のことはあまりせず、子供らに任せた。一族の者に何かがあると、心を尽してそのために力を注いだ。何度でも厭うことはなかった。

凶作の年に、先子が自分の土地を売って助けてやった者がいた。豊作の年になっ

て、その人は先子に償おうとした。先子は言った。

『わしは自分のしたいことをしただけだ。君のためにしたのではない』
と、受け取ろうとしなかった。

人に隠れて事を行い、世に知られないことを求めた。しかし、そうしたことを積み重ねたために、郷里の人々にいろいろと知られるところとなった。昔の「隠君子」というのは先子のような人であったのだろうか。

吾が兄の蘇渙が朝廷に仕えたことで、先子は大理評事を授かった。

母である史夫人は眉州の大家に生まれ、慈しみ深く、穏やかな人であった。史夫人はいつも樂しげに振る舞い、親類一同を和ませた。先子より十五年早くに亡くなり、蓬萊県太君の称号をお上から頂戴した。

私はこのように聞いている。唐が衰えてから、賢人は皆野山に隠れ、世の乱れを

避けた。そして勝手に皇帝を名乗った国は相次いで滅び、宋に至って全国が一つに平定された。それでも、野山に隠れた人々の子孫は父祖の故地を離れず、官に仕えようとはしなかった。そのために才能はあっても、世に顕れることはなかった。平和な世が続き、風俗が改まると、野山に隠れた者の子孫もようやく外に出て天下のために官職に就くようになった。そうした人々の才気は、質直敦厚しつじつとんこうの点では先祖に及ばないとしても、官の重い任務に十分に耐えるものであった。しかしながら、子孫が世に出ても、先人の行いが隠れたまま世に聞こえることがないのである、私はひそかに大いに残念がるのである。

だからこれはたまたま吾が先祖のことだから書くのではなく、万人の隠れた人の中の一人であるから、これを記録に留めて、吾が家に残して子孫に示そうとするのである。

——お父さんって、やっぱ理屈を立てて筋を通すのが好きなんだね。自分の先祖のことは大事なので書き残すというので、ちっとも構いはしないんだけどさ、そうではなくて、一般的に隠れたままであるのは残念だから、その一例としてせめて自分の先祖は自分でいうことだと断っているんだよね。

㊦ 父は何度も言うように、歴史の研究者でした。様々な史書を読み漁り、史書に記録された何方とも知れぬ人々の中に、我が祖先であるらしいのは蘇味道の他に6人だけしかいなかったということにある種の恐れを抱き、自分で記録しなければと「蘇氏族譜」を作成したのだと思います。

同様の思いは私にもあって、いまお話している帰郷のときよりもずっと後にな

って、祖父の蘇序の伝記をまとめました。父が「先人」について書いたのと重複するところもありますが、聞いていただきましようか。ここで「公」というのが祖父のことです。

公の諱は序、字は仲先、眉州眉山の人であった。その先祖は趙郡の欒城から来たようだ。その曾祖父を蘇斡といい、祖父を蘇祐といい、父を蘇杲と言った。その三代はともに官に仕えることはなく、皆世に隠れた徳があった。曾祖父の代から、義を為し施しを好んだことで郷里に知られ、公に至りますます評判が高かった。しかし公は、自分は先祖に及ばないと思っていた。

公の父は唐王朝の末に生まれ、周王朝の顕徳年間に亡くなった。その頃、蜀の地では、王氏と孟氏が順に皇帝を称していたが、公の父はその朝廷に仕えることは

なかった。

公の父はかつて蜀の都の成都せいとに遊び、ある道士に出会った。道士は人を遠ざけて公の父だけにそっとささやいた。

「若い人よ、君には優れた徳がある。わしと君にはある縁がある。わしは百物を変化させる薬方を会得した。世が乱れてもこの薬方があれば自分の命を全うできるだろう」

そう言って、その術を授けようとした。

公の父は笑い、

「僕はそれを学ぼうとは思いません」

道士は驚き、

「わしは天下を往来し、誰にもいまのようなことを語ったことがない。わしは何

でも分かっていると思っていたが、君が学ぼうとは思わないと言ったのはまことに思いもよらなかつた」

道士はそう言って去り、それっきり会うことはなかつた。

公は若いときから、大らかで小さなことにこだわらず、本を読んで大略がわかればそれでもう閉じてしまった。人より一步下がり、施しを好み、人が危難に遭遇すると、自分自身に対してする以上の面倒を見た。衣食に少しでも余裕があると、人のためにすぐに使い、たちまちにしてなくしてしまうのだった。それでいつも困窮し、しばしば飢えと寒さに困らされた。それでも一度も悔いることはなかつた。施して残りがあると、

「これは困っている人のための使い余しだ」

と、いよいよ惜しむことはなかつた。

ある凶作の年に、公は農地を売って飢民を救った。豊作の年が巡り来ると、助けられた人は公のために農地を買い戻そうとした。公は言った。

「私はもともと売りたいから売ったまでだ。そなたのために売ったのではない」

公は、知り合いであろうがなかろうが、人とすぐに打ち解け、笑って腹藏のない話をした。つまらない人間が公を侮り欺いても、怒ることがなかったので、人々は不思議に思った。

宋の統治が蜀に及んだ初めに、李順リジュンが反乱を起こし、眉州は反乱軍に攻囲された。公はこのとき二十二歳で、武器を手に城壁の上で戦った。反乱軍の攻撃がいよいよ厳しくなったときに、たまたま公の祖父が病気で亡くなり、家族は泣くばかりでどうしたらいいのかわからなかった。公だけは落ち着いて死者を送る礼を尽し、

そのありさまは平和なときと変わらなかつた。祖母がひどく気落ちしていたので、公はごく穏やかにこう言った。

「朝廷が民を見捨てることはありません。賊は必ず破れます」
実際に反乱はすぐに収まった。

その後の慶暦年間に、皇帝は州や郡に対して学校を建てるよう詔を下した。蜀の人々は、朝廷が蜀の人を採用してくれるようになる喜び、学校ができたら自分の子弟を真っ先に入れようと待ち構えた。

公は笑って、

「お偉いさんが格好を付けたいだけのことだ」
と言い、子供等が入学しようとしても止めた。

このころ郡吏は横暴で、民を苦しめたので、公はそれを批判する詩を作った。

子の蘇渙が朝廷に仕え、公は大理評事という名誉職を授かった。慶暦七年五月十日に家で亡くなった。七十五歳だった。八年二月に、眉山県修文郷安道里の先祖の墓の近くに葬られた。職方員外郎を贈られた。

史氏を娶り、史夫人は公に先立つこと十五年で亡くなった。公が亡くなったときに、蓬萊県太君を贈られた。

三人の男子がいて、長男が澹で、官に仕えることなく、公に先立って死んだ。

次男が渙で、科挙に合格して官員となった。渙は赴任したところで必ずよい評判を挙げ、任地から去ると、人々は渙を偲んだ。ある人は、渙を漢の時代の優秀な官吏になぞらえた。利州の任地で官職に就いたまま亡くなった。

三男が軾の父、諱は洵である。洵は霸州文安県主簿で終わった。

渙が蜀の閬州ろうしゅうの知事になったときに、眉州からほど遠くないことから、公はその

仕事ぶりを見に行つた。渙がきちんと正しくしているのを見て喜び、数日間そこに滞在した。閩州の人々は、公が賢人であるのを見て喜んだ。

公は晩年に詩を作るのを好み、巧みであることは求めず、いつも即興で、自分の思いをそのままに詠んだ。亡くなったときには数千首の詩が遺された。

娘が二人いて、長女は杜垂裕とすいゆうに嫁ぎ、次女は石揚言せきようげんに嫁いだ。男子の孫が七人いて、位い、份ぶん、不欺、不疑、不危、軾、轍ちやくと言う。

唐が減んで五代の乱れた世になったとき、蜀では学問をする者が少なくなり、学問をしても郷里に留まって敢えて出仕しようとはしなかった。

公がその子の渙に学問をするよう命じると、学んで至らないことはなく、渙はついに進士に及第した。渙が官員となって郷里に帰って来ると、土地の人々は皆で出迎え、その栄えある姿を見て、蘇の家の子に見習って学問をするよう子供等に

教えた。これより眉山県では学問をする者が千余人にまで増えたのである。

しかし、軾の父だけは学問に目を向けず、壮年に至っても書物を手にすることがなかった。公はそのような息子に何も言わなかった。ある人が「どうして放っておくのですか」と問うと、何も答えなかった。しばらく後になって、

「息子は学ばずにはいられなくなるだろう」

と、言った。すぐにその通りになり、軾の父は学問に努め、ついに世に名を顕した。

公に見識があり、人に施すことは郷里の間で知られていたが、世の中で大きな仕事をしたわけではなかった。特に幸運を得ることはなく、世間にその名が聞こえるようなこともないままに老いて亡くなった。しかし、その功名は少ないものであったのだろうか。

古の賢人、君子にも、やはり名が顕れることなく、世に伝えられることがなく終わった人達がたくさんいた。我々が知るのはごくわずかな者だけだ。公に伝えられることがないのは、ただ公が僻遠の地で一生を過ごしたからだけではなく、その子孫が公のことを人に語ろうとしなかったからだ。だから、その始めから終わりについて、為したことの大概をここに記録し、もって当世の君子にお見せするものである。

——いまのでちよつとわかったかも。今夜は最初に、郷里について話したいといつてたけど、そのココロはこういうことだったんだね。つまり、子孫が語らずして誰が語るのか、土地の者が語らずして誰か語るのかってことだよね。

㊦ その通りです。原文で言いますと、

其子孫不以告人之過也（其の子孫の以って人に告げざるの過あやまちなり）。

先祖のこと、郷里のことが消えてしまうのは、子孫が語らない過ちのせいであると気づいたからには、語らずにはいられません。

——えーと、いま聞かせてもらったお祖父さん伝記には、さつき話してくれた野辺の宴会のことはなかったようだけど、それは書き記さなかったの？

㊦ 全てを網羅的に書いたのではなく、どこかで母の実家のことを悪く書くよう

なことは控えようという気持ちが働いたのでしよう。文字として残しはしませんが、親しい人に話したことはあります。

私が50歳くらいの頃だったでしょうか、若い友人が連れ立って訪ねて来まして、その日がたまたま5月11日、つまり祖父の命日であったので、祖父の思い出を二、三語り、その折に野辺の宴についても話しました。

若い友人の一人を李薦りせんと言ひ、私と同じ年に科挙に合格した李惇りどんの息子でした。

李惇は息子が6歳の時に亡くなり、李薦は父のように科挙に合格して、父が十分に果たせなかった官界での活躍を目指して懸命に勉強をしました。しかし、詩文の才には恵まれながら、試験との相性が悪かったのでしょうか、何度かの失敗を繰り返し、33歳で落第したのを最後に断念し、不如意な日々を送りつつも著作に専念し、50歳で亡くなりました。いくつかの書物が残され、私が話したことも

あれこれ書いてくれています。

ついでながら、私が58歳のとき、政治的な理由で都から地方に転出することになり、後輩諸氏が送別の宴を開いてくれました。私は特に3人を選んで、酒を満たした大きな盃をそれぞれの前に置き、

「君等はこれを飲み干さなければいけない。これは君等を罰するものだ」と、言い渡しました。

——あれっ？ 罰で酒を飲ませるって、典型的なアルハラだったりしない？ 徳利奉行をきらっていたのに、なんか矛盾じゃんか。



3人は十分に酒に強かったという言い訳をしておきましようか。3人は怪訝

な顔をしながらも盃を飲み干し、

「何か私どもに落ち度がありましたでしょうか」

「他でもない。諸君等は試験監督になりながら、李薦君を落したではないか。李薦君はもう試験を受けないと言っている。それは李薦君にとって残念なことではなく、有能な士を用いることができなかつた国家にとつてもなほだ残念なことである」

本気で3人を罰しようとしたのではなく、私は都を去るので、浪々の身の李薦に心をかけてほしいという思いを示したのでした。

すると、ある者がより大きな盃を私の前に置き、

「でしたら、先生にはこれを飲んでいただくかなければなりません。確か、先生が6年前に試験監督の長をなさったときにも、李薦君は落第となつたのではありま

せんでしょうか。こちらの3人と先生とどちらがより罪が重いと言うべきでありましようか」

私は大盃に口を付け、一口飲んで降参しましたので、一同は大爆笑になり、私はいくれぐれも李薦のことを頼むと言って都を去ったのでした。

——えーと、今の話は十分には飲み込めなかったけど、トバー君は、スーパーの欧陽脩が試験のあり方を変えてくれたおかげで合格したんだったよね。トバー君も試験監督の長をしたのなら、同じようなことはできなかったの？ うまいことしようとしても李薦という人の実力が足りなかったのかな。



試験監督の長は、出題の傾向や採点基準を変えることは可能であっても、特

定の誰かに対して便宜を図ることは一切できませんでした。欧陽脩のときは、文学の改革の機運と試験の改革が連動したのですが、それは宋代を通じてそのとき一回限りのことでした。私は幸運であつたのでしょうか。

李薦君の実力は十分にあつたと思います。試験の本番に弱いところがあつたのでしょうか。我が父とは理由は異なりますが、試験では自分の才能が正当には評価されない、同じように科挙と決別したのでした。

李薦君等が来たときに祖父について話したことで、先程の伝記には書かなかつたことを付け加えておきますと、祖父はそれなりに商売に成功し、程の家と比べるとかなり財産は少なかったものの、人々を野辺に集めてしばしば酒をふるまうくらいのことではできていましたし、また息子を科挙に受験させるだけの経済的な余裕もありました。息子が勉強を始めた頃に祖父も読み書きを覚え、自己流の詩

を作るようになったのだらうと思います。

祖父は商売で得た利益を人のために使ってしまうことがよくあったのですが、手元に残ったものがあると若干の農地を買い、そこに稲よりも粟をより多く植えていました。そして、余剰を倉に蓄えるときには、稲も粟に代えていました。どうしてより価値の低い粟に代えるのか、人々はおかしなことをするものだと思っていました。粟の蓄えは年々増え、三、四千石にもなったときに、眉州は大飢饉に見舞われました。祖父は倉を開き、一族の者、遠い親類の者、近くの貧しい人々に粟を配り、眉山県では飢え死にする者はいませんでした。祖父が粟ばかりを蓄えていたのは、米よりも粟の方が長持ちし、いざというときに役立つからだだったのです。

祖父は空き地があれば芋を植え、食べ物が乏しくなる季節に、芋を蒸して門の

外に山のように積み、困っている人に自由に持つて行かせていました。

——へーえ、そうなんだ。もうけた分を、ちゃんと地域貢献に使ったってことなんだね。いまでいうとCSRってことだったりするのかな。

㊦ 祖父は不正義を嫌い、あるとき非常に思い切った行動に出ました。例によって野辺でわあわあ楽しくやっていて、不意に顔付きが変わり、

「いまから行くぞ。わしに付いて来い」

祖父は人々を引き連れて一度家に帰り、斧やら鍬やら槌やらを各々に持たせ、茅ぼう將軍の祠しょうぐんへと行進して行きました。

茅將軍と言うのは、そのころ急に流行り出した神様で、茅將軍は眉州を選んで

天から降臨し、祈る者には福が訪れるが、疎かにした者には禍があると、土地のまじない師どもがやかましく言い立て、人々はまじない師どもに指図されるがままに財産を茅將軍につき込み、茅將軍の像を作り、祠を建て、狂ったように崇めたのでした。

祖父は茅將軍の祠に着くと、まじない師どもが制止するのを聞かず、人々に号令をかけて茅將軍の像を粉々に砕き、川に放り込んでしまいました。まじない師どもは、茅將軍のひどい祟りがあるぞと叫んだのですが、その後一切何事もありませんでした。

——茅將軍って、うちの町の名と同じ漢字を使っているよね。ひよつとして、その將軍様はトバー君のお祖父さんにひどい目に合されたので、流れ流れてうち

の町にきたってことだったりして。河童徳利も実は茅將軍の発明品……。

㊦ そうはならなかったという理由をお話します。

その事件から3年後に伯父は科擧に合格しました。祝賀会用の荷が届いたことで、息子が長江を遡ってこちらに向かって来ていることが知れ、祖父はじっと待つていることができます、川を下って迎えに行きました。劍門けんもんというところで落ち合い、ともに七家嶺しちかがいにまで戻って来ますと、そこに大きな廟があつて、「茅將軍」の額が掲げてありました。

それを見るなり祖父は、

「これは全くけしからん。あやつはここで悪さをおったのか。わしが来たか
らには容赦はせぬぞ」

いきり立って、人々を引き連れて廟に乗り込んで行きますと、その前にころげ
るようにして廟を守る者が出て来て、地に伏して言うのは、

「もしやあなた様は蘇七君様にございませうか」

「いかにもわしは蘇の七郎である」

「やはり左様でございましたか。昨夜、夢に茅將軍様が現れまして、泣く泣く申
しますには、

『明日、蘇七君様がここに来られることになっている。わしは蘇七君様が恐ろし
くてならぬ。どうか赦して下さるよう、とにかく頼んでほしい。幸いにもこの廟
を壊さず、お目こぼしただけのなら、この土地のためにこれからは全身全霊
で尽くすようにしたい。どうかどうか、うまくお願いしてほしい。あんな恐ろし
い人はいない』


そのように言つてがたがたと震えておられました。というわけでございませうで、何卒ご容赦願います」

平身低頭で頼み、伯父も間に入つて祖父をなだめましたので、

「ならば今日のところは勘弁してやろう。しかし、よいか、もしも茅將軍が悪さをしたと少しでもわしの耳に入ったなら、ただちにすつとんで来るからな」

— そう言つて立ち去つたのでした。

— ということで、茅將軍は七家嶺を安住の地としたので、こちらの町にまで逃げて来たということはなかったでありますよう。

— そういえば、トバー君はどつかの山の神様とやりあつたんだよね  第1
0回。それはお祖父さんの真似をしたのかな。

㊦ 真似というよりは、神を騙った不正義は許せないということです。

祖父のこの一件があったのは私が生まれるよりも前で、伯父は科擧の合格後に一度帰郷してからは役人としてずっと各地を転々としていましたので、私達兄弟は伯父のことは話に聞くだけで、実際にその顔を見ることはありませんでした。

そして、祖父が75歳で亡くなったとき、たまたま旅に出ていた父も伯父も相次いで帰郷し、私達兄弟は初めて伯父と直接話をすることができました。私が12歳、弟は9歳でした。

伯父はとにかく雲の上のような存在で、直視するのが憚れるような感じすらありました、伯父は常に背筋をぴんと伸ばして片時も姿勢を崩さず、威厳があつて近寄り難い雰囲気を漂わせていました。

あるとき、伯父から、君等はどのように勉強しているのかと尋ねられました。

私は緊張して、寺子屋で勉強していることを答えましたが、弟はまだきちんとした勉強を始めていなかったもので、どのように勉強をしたらよいのか教えて下さいと尋ねました。

伯父は微笑み、

「私が書物を読み始めたのはちようど君くらいの頃だった。いちいち先生に教わるのではなく、自分で読んで理解することに努めた。少し大きくなってから、文章を作ることを学んだ。一日に書くべき量を決め、それが終わるまでは決して休まなかった。学ぶべきはそれだけではない。書物を読み、書くことだけが学問ではないのだ。世の規範となり得る人間になるべく自らを律することはできなくてはならない。君くらいのころから、外を出歩くときには、私は身だしなみも身の

振る舞いも全てをきちんとするように努めた。家の内にあっても、誰からも見られていなくても、決してだらしないことをしないようにした。あのころは私だけがそうしたのではない。私の勉強仲間も皆同様であった。もしもそうしないと、郷里の人々にこのように言われたものだ。

『あんなだらしないことで学問をしているとは言わせない。とんだ恥さらしと言
うものだ』

当時は学問をする人は多くなかった。学問をしても行いの悪いような者がいるということも聞かなかつた。私は官職に就いて20年余りになり、郷里に帰つて来て、この地に正しい学問の伝統が根付き、勉学に励む者が他の土地よりも多いのを見て、まことに嬉しく思っている。君達も同じように励んでほしい。

言っておくが、君達は、学んで人よりも優れた者になろうと思うことはない。

私がこれまでに過つところが少なかったのを見習ってくれたらいいと思うだけだ」

伯父の言葉に、弟は教えの通りにすると力強く返事をしました。私は伯父の言ったことと、父が心に抱いているであろうこととの違いを感じ、弟ほどにはきっぱりとした返事ができませんでした。

——えーと、それはどういうことかな？ そのときにお父さんはいくつだったの？

㊦ 39歳でした。その前に制科に失敗し、傷付いた心で各地を放浪していて、訃報を聞いて帰郷したのでした。

——ということは、お父さんにとってかなり苦しいときだったんだらうか。お父さんはどつちかというところ「学んで人よりも優れた者になろう」と懸命だったんだよね、たぶん。とくにお兄さんに追い付きたいと思っていたらうね。だけど、うまくいかななくて、いいところを見せられずに父親を喪って、苦しいよね。

お兄さんの方は、官僚として20年働き、久し振りに帰郷して、亡くなったお祖父さんのように郷里において人々に慕われて生きるのも人として大変に立派なことであると、思ったりしたんだらうなあ。だから、人より優れた者になろう、出世しようとか考えるよりも、まずはきちんとした人間になるようになっていったんだよね。



伯父が郷里にいた間に父とどのような話をしたのか、私は聞いてはいません

が、この時期に、父は試験を受けることを断念し、学問で身を立てようと決意したのは間違いありません。父は過去に書いた文章を全て捨て去り、新たに自分独自の思索を徹底的に練り直し、その後新たな文章を書き始めたのでした。伯父の影響がなかったと考える方が不自然でありましょう。

もう一つ、我が姉が程の家に嫁いだのは伯父が郷里にいる間のことでしたから、そこにも伯父が何らの関与をしたのだらうと思います。それが姉の不幸を招くとは、もちろん誰も知ることはありませんでした。

さて、話を元に戻しますと、私達は「族譜亭」を後にし、いよいよ眉山県の町へと入って行きました。回り道をしている間に、私達が帰って来たことが町に知れたのでしよう、大勢の人が道に出て迎えてくれました。そこにたくさんの方の顔があるのを見て、故郷に帰ったことを改めて強く実感しました。

伯父が帰郷した時の気持ちはどうであったのか、そのとき少し知れたような気がしました。伯父は、官員として根無し草のように各地を転々とする暮らしを続け、果たして故郷に根付いた暮らしをするのとどちらが本当によかったのか、心の内に揺れる動くものがあつたのだらうと思います。さきほどあなたがおっしゃった通りで、それが弟に対する教えにも反映していたのでしよう。

私の本性は鹿です。鹿は野山にあるのを求めます。郷里の人々の顔を見て、この人達と生きるのが自分には最もふさわしいのではないか、祖父と同じようにここで自由気儘に詩を詠んで暮らすのがいいのではないかと、強く思わずにはいられませんでした。

—— 都は嫌いだと何度も言ってたしね。

㊦ 本来の場所に戻って来たとの思いを強くして、人々とともに我が生家に向かいました。それは紗穀巷さこくこうというところにありました。地名に「紗」という文字が入っているのは、そのあたりに絹の糸や布や織物を商う人々が集まり住んでいたからです。我が先祖もやはりそのような商人でした。紗穀巷にはその町の名の由来する商売をずっと続けている家が何軒もあり、そこに足を踏み入れれば、自分の出自がどこにあるのか、思わずにはいられませんでした。

——もしもトバー君が商人のままだったら、どうなんだろう、意外と大成功したりしたのかなあ？ それとも店をつぶしたかな？ 大きくどつちかに分かれるような気がする。堅実に商売を守ったというのにはありそうにないもの。

㊦ 父は先祖についていろいろ書き残しましたが、我が家の商売については一度も触れていません。中国の伝統的価値観では、利益の追求を第一義とする商人は、自然の恵みを生産活動の基盤とする農民よりも常に下に見られ、厳密にいうと商人は科挙を受験できないことになっていました。そのため、商人としての出自を隠すということがよくあり、例えば唐の時代の李白りはくがそうでした。李白は私と同じく蜀の出身で、西方との交易で莫大な利益を得た商家に生まれたのですが、そのことを自ら明かすことはありませんでした。

父は先祖も自分自身も商人であったことを明らかにするのを避けたましたが、決してそれを恥じていたわけではありません。恥じるか誇るかは、商人であるか否かにあるのではなく、郷里の人々から敬愛される正しい生き方をしたかどうかにか

あると考えていました。

生家の前に着くと、人々に改めて帰郷の挨拶をしてから、二つの棺とともに家の門をくぐりました。

入るなり、心の内にあつた生家のイメージとの落差に強い違和感を覚えました。思っていたよりもそこは狭く、そして貧相であると感じました。7年の歳月経て特に変わったところはなく、よく知っている通りの生家でありながら、大きく違うように感じたのでした。

弟も同じような感覚であつたのでしょうか。

「記憶というものは、美しく変って行くものなのでしょいか。ここは私達にとつて何よりも大切なところと常に思っていたために、あるいは皇城よりも広くそして美しくあるとまで思ってしまったのかも知れません」

父は7年前に郷里を出たときに、紗穀巷の家にはもう帰らないことも十分にあり得るとして、親類の者に託しました。親類はほとんど手を加えず、ほぼ元のままの姿ままで、7年分だけ古びてはいました。

我が生家は、そこそこ成功した商人の家としてはまあまあ一般的な大きさでした。もしも現在のこの町の中心部に置いたならば、面積だけでいえばかなりの大邸宅ということになるのかも知れません。塀で囲まれた空間に、幾つかの建物が散在し、南側にこじんまりとした庭がありました。父は、池を掘り、土を盛って小さな山を築き、池には蓮を、山には松や竹を植えました。あるいは梨のような果樹、あるいは菊のような花を適宜場所を選んで植えました。その庭を原型として、父と弟は都の家に数倍の広さの庭を作り、私は鳳翔の官舎の裏に庭を作りました。そのようなこともあって、元の家が狭小であると感じたということとはたぶ

んあるのでしょうか。

——ちよつとした旅行なんかから帰ってきたときに、「ああ、なんだあ、こんなところで暮らしてたんだ」って、ちよつとへんな気分になることってあるよね。うちなんかはホントに狭いから仕方ないんだけど、広い世間を見てくると、自分の日常がとくに小さく見えたりするんだろうね。それがなんか愛おしいような感じもなかったりするんだけど。

㊦ まず二つの棺を納める場所を決めるために、父がかつて学問に励んでいた部屋に行きました。中に入ると、そこは完全に以前のままでした。つい今しがたまで父がそこで思索にふけり物を書いていたような気配が強く残っていて、ここは

ふさわしくないと感じました。

弟は窓辺に据えられた父のお気に入りの置物に目を向け、

「どうやらここでは、もしかすると、安らかではおれらなくなってしまうかねませんでしょう」

弟も同じように感じていたのです。

——安らからでないというのは……つまり、わしはまだまだ仕事を続けなければあかんのだと、棺からむっくり起き上がって、というようなことかな。

㊦ 置物とは木の根のオブジェです。この海岸でも、浜に打ち上げられた漂着

物を拾って観察したり、装飾物にしたりするビーチコーミングが行われることが

ありますけれど、川の流れと海の波にもまれた樹木を何かに見立てて飾り物にするということは昔からありました。

父は旅先で、三つの峰からなる山のような形をした木の根を見つけ、部屋に置いて日々に眺めていました。木ほくかざん仮山と名付け、次のような一文を書いています。

木となって生まれても、不幸にして、ひこばえのまままで終わってしまうのもあれば、人の腕くらいになったところで枯れてしまうのもある。幸いにも家の棟木になるくらいにまで成長したところで、人の手で伐られてしまうのもある。あるいは、不幸にして、風に倒され、水に流されるのもあり、そして碎けて腐ってしまうのもあれば、幸いにも碎かれ腐ることから免れても、人に拾われ、木材として使うために斧で伐られ、鋸で切られてしまうのもある。最も幸いなのは、浅瀬に

流れ着いて砂の下に埋もれ、何百年か後になって、好事家に掘り出され、その形が山に似ているとかで愛玩され、斧や鋸で傷付けられずにすむものであろう。そのようなものでも、遠い辺鄙な地にあったのでは、好事家の目に触れる機会はなく、結局は薪にされてしまうであらう。最も幸いなものになりかけて、不幸なものとなってしまふのである。

我が家には三つの峰を持った木仮山がある。それを見るたびに、運命とはいかなるものであるかを私は疑わずにはいられない。この木は生まれて、ひこばえのままで終わってしまうことはなく、人の腕ほどで枯れてしまうこともなく、家の棟木になるくらいまで成長して伐られてしまうこともなく、風に倒され水に流されてからも碎かれて腐ることもなく、木材として使うために斧で伐られ鋸で切られることもなく、浅瀬に流れ着いて砂の下に埋もれ後に薪にされてしまうこともな

く、こうして我が家に来たのである。こうなったのは、単なる偶然ではなく何か理由があるのではないだろうか。

私がこの木仮山を愛するのはただ形が山に似るからだけではない。運命の玄妙さを感じる場所があるからだ。そしてただ愛するだけでなく、この木を敬う気持ちもある。

三つの峰の中央は、大きく険しく、まことに重々しく、左右の峰を従えるような勢いがある。左右の二つの峰は、中央の峰に勢いでは服しているように見えても、鋭く威厳のあるありさまは、犯すべからざるものがある。二つ峰には決して中央の峰におもねる気持ちはない。そのようであるから、三つの峰からなるこの山を敬い、感じる場所があるのだ。

——もしかして、なんかわかったかも。その三つの峰というのは、お父さんとトバー君兄弟のことだったりしない？ やっぱそうだよね。お父さんはその木の根を見ながら、いつまでも田舎に埋もれていないで、好事家の目に触れて、世の中に出たいと、強く願っていたんだよね。そんな思いの充満した部屋に置いたのでは、たしかに棺の中の人はおちおち眠っていられないかもね。

㊦ そこで私達は、かつて2人で勉強していた部屋に行きました。その部屋の前にちよつとした木の茂みがあり、その傍らで足を止め、木々の枝の間をのぞき込みました。

「巢作りの季節であるのに、鳥は来ていないようだな。密に繁り過ぎてしまったせいだろうか」

「あれだけたくさん鳥が来ていたのは、あの頃だけだったのでしょ」

弟はしんみりと言いました。

あの頃とは、母に勉強を教わることの多かった時期で、その思い出を、私はずつと後になって書いたことがあります。

私が少年の頃、勉強部屋の前に竹柏なつきや桃の木があり、その左右にたくさん草花があった。木にはいろいろな鳥が来て巣を作っていた。

母は生き物を殺すことを嫌い、子供も使用人も鳥を捕まえることを許さなかった。何年かして、鳥は低い枝にも巣をかけるようになり、その雛を上からのぞくことさえできるようになった。

羽根が五色に輝く桐花鳳とうかほうも、毎日、四、五羽やって来て、そこらを飛び回るよう

になった。この鳥の羽毛は珍重され、なかなか見るのさへ難しかったのだが、我が家では人に馴れ、恐れることはなかった。近くの人が見に来て、これは珍しいと言いつつ合った。

これはほかでもなく、生き物に害を加えることのない母の誠の思いが、鳥にも信用されたからである。

土地の老人はこのように言った。

「鳥は人から遠く離れたところに巣を作ると、その雛は蛇や鼠や狐や狸や鴟やむじな 鷺とびに食べられてしまう憂いがある。だから、人が殺さないとわかれば、むしろ自ら人に接近して、雛の危険から免れようとするのだ」。

ということからすると、鳥が遠くに巣を作って人に近づこうとしないときは、人が蛇や鼠よりも悪さをすると鳥が考えていることになる。「苛政は虎よりもかせい 猛なり」もう

という孔子の有名な言葉があるが、鳥の判断も全く同じで、思いやりのない人間のそばにいるよりは、自然の苛酷な環境下にあった方がまだよいと考えるのである。

——ツバメが軒先に巣を作るのは、まさにそういう理由からだっただよね。天敵から雛を守るために人間に近づいたんだけど、いまではカラスが増えすぎて、ツバメの安全な場所がなくなっちゃったみたいだけど。

鳥の巣というとジョン・クレアかな。たくさん詩に詠んでいるんだ。

だからこの巣をそのままにしておこう、

太陽の光と花と小川に恵まれた幸福な家を。

だがいたるところで土地をふさいでいる有害な雑草のように、もっとも魅力的な場所においてさえ危害は生じる。

なぜならば、死をもたらず冷たいとぐろを巻くへビは

このような巢をじっと見つめ、無力なひな鳥をぐいと捕まえ、

そしてまるでペストがその家の訪問者になったかのように

もはや家とはおもわれない家を、すなわち略奪した巢を残すからだ。

(鈴木蓮一訳、113ページ)

これは黄色いアオジの巢を観察して詠んだ詩なんだけど、やっぱトバー君はお父さんの子なんだね、そう思うよ。だって、何かしら人間社会に関する理屈を導き出そうとするんだもの。お母さんが鳥にも愛情を注いだということだけで十

分にはいい話のはずなのに、そのあとで一発議論しておかないと気がすまないんだよね。

㊦ そのような傾向は私や父に限るものではないように思いますが、それがなぜなのかということ話を話し出すと、それこそ面倒な議論になりかねませんから、それはそれとして、母についてももう少し語っておきたいと思います。

母は何度も申ししている通り、私達兄弟が科挙に合格した直後に亡くなり、私達はすぐに帰郷し、母を故郷の墓地に埋葬しました。嘉祐^{かゆう}2（1057）年11月のことです。父はそのとき、人々の前で次のような母を悼む言葉を朗誦しました。もとは1句が4文字ずつの整然とした形式の韻文ですが、日本語としては普通の散文として訳します。

ああ、君との好は百年と約束していた、
よしみ

その半ばで私を棄てて先に逝ってしまうとは――。

私は都に行き、遠からず帰ることになっていた、

君がこうも早くに逝ってしまうとは――。

君は去って帰らない、

私は永く哀しみ続ける、

反復して君を思うのなら、

もしや帰り来るのではなからうかと。

人は言う、

死生の短い長いは思い通りにならない、

誰しもそれは異なることはない、と。

それはわかっているても悲しまずにはいられない、

生きてこれほどの災いはないのだから。

君には六人の子があった、

いま誰がここにいるのか。

ただ軾と轍だけがいてくれている。

ああ、君は二人を慈しみ育て、

二人はすでに成人となり、すでに結婚もした。

君は二人に学問を教え、

世に何も聞こえるところがないままではいけないのを願っていた。

昼となく夜となく、君が子等のために尽くしていたのを、ほかでもない私は知っていた。

私が子等を連れて東に旅立とうとしたとき、門を出るのをためらわずにはいられなかった。

いま出発して、もしも思うところが叶わなかったら、いつの時に帰ればいいのかと――。

二人の息子は、私に言った。

「どうしてぐずぐずしているのですか、

後に悔やむことなどがあるでしょうか」

二人の息子は郷里を遠く離れ、寒さにも暑さにも耐え、

一つの試験に合格して宮中での試験に挑み、

堂々の文章を書いて、お歴々の方々を驚嘆させた。

二人の息子が喜んだのは、

官に就けるよりも何よりも、

自分等の文章が世に称えられたのを、

きっと母が喜ぶと思ったからだった。

二人の息子は、母が長生きすることを願っていた、

千里の彼方の故郷に帰ってみれば、

家は無人になっていた。

いくら泣いても母の姿を見ることはできないのだった。

私は、君が平生手にしていたものを見るにつけ、

しみじみと泣かずにはいられない。

ああ、私は老いて一人になった。

君が逝ってしまったって、家の中の良き友がいなくなった。

終日孤独であるばかりではない、

過ちを為しても正してくれる者がいないのだ。

昔、私が若かった頃、

私は遊び呆けて勉強をしなかった。

君は何も言わなかったけれど、

心の内は穏やかではなかったのだろう。

私がいままでたってもふらふらしているのを、

君が心底憂いているのを知り、

私は慨嘆し、ついに気持ちを入れ替えた。

そこから、今日に至った。

ああ君は死に、再び君と時を同じくすることはできない。

あんちん さと
安鎮の郷、里の名は可竜、かりゅう

ぶよう
武陽県に属するところ、

州の北東の小高い丘、

そこに君の墳墓がある。

墳墓には二室を掘った、

いつしかそこで私は君と一緒になる。

骨や肉は土に帰るが、魂はそうではない。

私達の旧い家は一切を改めずにおこう。

我が魂は帰るべきところに帰るであろう。

このときに歌った通りに、父はもとのままの旧い家、帰るべきところに帰って来たのでした。

——たしか、トバー君のお姉さんが亡くなったことで、お父さんと奥さんの間は微妙な感じになったって以前に聞いたような気がするけど、お父さんは本当のところは奥さんのことを大切に思っていたんだね。

④ 姉のことさえなければ、まことによい夫婦であったのです。

父は、いまの韻文の中で、門から出るときにためらいがあったと言いました。

私達兄弟を連れて都に向かったとき、父には並々ならぬ思いがありました。父自身は己の学問の力だけで天下に名をなし、息子達は科挙の合格を勝ち取り、親子3人が同時に士大夫したいふの仲間入りをするのです。それまで頭の上がらなかった程の家を見返してやることもできません。もしも全てが水泡に帰したならば、一体どの面で帰つたらいいのでしょうか。父は幾度となく旅に出て、幾度となく失意の帰郷をしました。今度は息子2人も一緒でした。3人でおめおめと帰ることなどできるものではありません。

——お父さんはほとんど全ての望みを叶えたわけだけれど、ただひとつお母さんの寿命は思い通りにならなかったんだね。つらい話だねえ。

㊦ 父は初めて母を喜ばせることのできる帰郷が叶ったと思ったのに、そうはならなかったのは痛恨の極みでありました。その無念さを弟は強く受け止めていたのでしょう、今回棺を携えて帰郷するに当たり、ある人が弔問に来られた際に、弟は母の墓誌銘を執筆してほしいといきなり頼み込み、その人をひどく当惑させたのでした。

ここで、あなたにとってはどうでもよいような細かいことを少しばかり申し上げます。それを聞いていただかないと、弟の思いをおわかりいただきにくいからです。

亡くなった人の生前の人となりを書いた文章には、墓誌銘、墓表、行状、哀詞など幾つかの種類がありました。墓誌銘は墓の内部に納められ、墓表は墓に通じる

道に建てられた碑または碣けつに刻まれ、行状は基礎的な略伝、哀詞は埋葬の際に読み上げる韻文です。先程の父の韻文は哀詞です。

墓は、本人ないし家族が好むままに自由に作っていいものではなく、身分によって細かな規定がありました。親孝行を最上の徳としていた社会ですから、より手厚く葬ろうと競って際限がなくなってしまうので、規制が必要だったのです。

規定の一例として、官位が五品以上であった者は墓に行く道に碑を建てることができ、七品以上はそれより小さい碣を建てることができました。我が父は亡くなったときに従八品が追贈されましたが、それでは碑も碣も建てることはできませんでした。

前回申しましたように、父の墓誌銘は歐陽脩に書いていただきました。碣は建てられないので墓表はなく、哀詞は曾鞏そうこうという人に書いていただきました。曾鞏

は、私が科擧の2次試験で順位を入れ替えられたときにトップになった人です。

父については、こうして名文家の2人に書いていただけてまことによかったわけですが、母には父の哀詞しかありませんでした。そのときの帰郷に先立って父が士大夫の仲間入りを果たしていたならば、必ず誰かに墓誌銘の執筆を依頼していたはずです。それができなかった父の無念さを思い、書いていただくなら、やはり欧陽脩や曾鞏に並ぶ、あるいはそれ以上に名のある人であるべきだと弟は考え、意中の人が弔問に來られた機会を逃してはなるものかと、出し抜けに執筆を頼んだのでした。直球勝負の弟らしい思い切った行動で、頼まれた人も驚きましたし、何も聞いていなかった私も驚きました。

その人というのはしばこう司馬光で、後に『しばじつがん資治通鑑』という歴史書を編集したことで知られています。

——ああ、その名前なら聞いたことがあるよ。司馬光は『資治通鑑』という組み合わせは、世界史で暗記したからね。それに、叔父さんの本箱には『資治通鑑』が麗々しく収まっているんだ。叔父さんはおもしろいっていうんだけど、ホントにあんなものを読んでわかっていいのかあやしいんだけどなあ。

㊦ 司馬光は私より17年先輩で、私が2歳にときに科挙に合格しました。英宗皇帝の実の父の祀り方を巡って大論争となったとき、韓琦かんきや歐陽脩等の執行部を批判した側の旗頭の1人が司馬光でした。私は論争には立ち入りませんでした。普通には歐陽脩寄りの人間だと見られ、司馬光とはさほどお付き合いがありませんでした。

司馬光は突然の執筆依頼にとまどい、

「あなたのお母様とは生前に全く面識がありませんでした。私にはお引き受けする資格がないと思います」

そう言って固く辞退したのですが、弟はこうと決めたら絶対に引かないたちで、ついには強引に「うん」と言わせてしまったのでした。

——えーと、ちよつと話をもどすと、その大論争では、執行部側が反対する人達を都の外に追放したんだったよね。司馬光は大丈夫だったの？ どっかで体制側になびいたの？



司馬光は学者肌の一本気の人で、自分の考えが正しいと思ったら、断固とし

て妥協することはありませんでした。しかし、正しいかどうかの論争はそれとして、政治的な対立が先鋭化するのを嫌い、執行部側が力で押し切ろうとしているのを察知すると、朝廷における重職を退いて、代わって皇帝の学問指南役という比較的暇な仕事に就いて、論争が鎮静化するのを待ったのでした。司馬光はそれによって処分を免れたのですが、同じ論陣にあった仲間が都から追放されると、自分も同様に処分してほしいと願い出ました。それは却下されて司馬光は都に残り、閑職に移ったことから歴史の研究に時間を注いで、後の『資治通鑑』の編集へとつながって行くのでした。

それはともかく、弟が用意した伝記的資料に基づき、というよりそれをほぼなぞるようにして司馬光は次のような墓誌銘を書いて下さいました。ここで蘇府君と言っているのが我が父のこと、程夫人と言っているのが母のことです。

治平三年夏、蘇府君が都で亡くなったので、私が弔問に行くと、遺族の蘇軾と蘇轍が泣きながら次のように言った。

「私達は父の棺を蜀の地に埋葬するために帰郷します。蜀人の習慣として、夫婦は墓を一つにし、内に二つの室を設けることになっています。かつて父が母を埋葬したとき、母の室に墓誌銘を刻みませんでした。この機会にあなたさまに託して墓誌銘を刻みたいと思います」

私は固辞したのだが、ついには引き受けることになり、このように答えた。

「程夫人の徳を残念ながら私は存じ上げません。どうかその概略をお教え下さい」
よって二人の子息は程夫人の事略を私に授けてくれた。

程夫人は程文応の娘で、十八歳で蘇府君に嫁いだ。蘇府君はこのとき極めて貧乏

で、程の家は裕福だった。蘇府君の家で程夫人がどのような振る舞いをするのか、一族の者はしげしげと見たのだが、程夫人には少しの落ち度もなく妻としての仕事に立派に努め、孝恭にして謹儉であったので、誰からも賢い女性であると認められた。

ある人が程夫人に言った。

「あなたの御両親は財産が乏しいわけではないのですから、援助を求めたならば、父母の愛で応じて下さいますでしょう。それなのに、苦しい暮らしに耐えて、どうしてあちらにひと言もおっしゃらないのですか」

程夫人はこう答えた。

「おっしゃる通り、私から父母にお願ひすれば、きっと聞いて下さらないことはありませんでしょう。でも、もしもどなたかが、我が夫に『妻子を養うために誰

かにすがったらどうだい』と言ったりしたときに、我が夫はどのようにするでしょうか。私は夫と同じことをするだけです」
ついに程夫人は実家に援助を求めなかった。

——えーと、口をはさんで申し訳ないんだけど、なんか前に聞いた話と違っていない？ たしか、実家から支援を受けたように聞いたと思うんだけど。それで、お父さんは実家に頭が上がらなかつたんだよね。

㊦ 事実としては、結婚当初、母は我が父の家に来てその実態に驚き、人から援助を求めるように勧められました。父は祖父とは独立して居を構え、それなりに商売上手ではあったのですが、放浪癖があり、金銭を気前よく使ってしまうとこ

るもあって、家には何の蓄えもなく、家計はいつも火の車でありました。

母は、そのころは墓誌銘にあるように、苦しくても実家に援助を頼むことはありませんでした。しかし、後になって父が学問に目覚めてからは、我が家を守るために、母は実家に支援を仰ぎました。金銭的な支援もありましたけれど、地域における実家の力を借りたのが大きかったように思います。そのことはこの後の記述で示唆されますが、明記はされません。

では、続きです。

このとき蘇府君の祖母がなお健在で、老いてますます厳格であった。家の者はその部屋の近くを通過して、祖母の声が耳に入ると、何か叱られるのではないかと非常に恐れた。ただ程夫人だけは祖母の気持ちに適い、祖母はにこにこ話かけた

のだった。

蘇府君は二十七歳になるまで勉強には見向きもしなかった。ところが、ある日のこと、興奮した様子で、程夫人に言った。

「私は我が身を顧みて、いまならまだ学ぶことができるように思う。しかし、家業のためには働かなければならない。学べば家業は廃れる。どうしたらいいだろうか」

程夫人は答えた。

「私はずっと申し上げたいと思っておりました。しかし、私からあなたさまを勉強に仕向けるということではきつとよろしくないと思っておりました。あなたさまが自分のお心から勉強されるのであれば、家業はどうぞ私にお任せください」

程夫人は自ら経営に乗り出し、数年の内に家は裕福になった。蘇府君は思い通り

に学問に専念し、ついに大学者として大成した。

程夫人は読書を好み、書物の要点を把握し、息子の軾や轍が幼い頃は、程夫人は二人を自分で教え、常にこのように言って戒めた。

「書物を読むときに、同輩のことを気にするようであってはいけません。書物を読むとは、己をひとかどの人間にするためのものです」

さらに、程夫人はいつも古人の名言を引いて、二人を厳しく励ました。

「おまえたちが正しいことのために死ぬのであれば、私は少しも寂しいとは思いません」

二人は同じ年に科挙に合格し、二人は同じ年に制科にも合格した。宋朝が始まってから、制科に第三等で合格したのは呉育ごいくと軾だけである。

轍が鋭い直言で人を驚かせるのは、程夫人の教えによるのであろう。程夫人は息

子のことをよく知っていたと言わなければならない。

程夫人は家財がようやく豊かになったときに、嘆息してこう言った。

「これは福と言わなければならないのでしょうか。そうではありませんまい。これは我が子孫を愚かにするものです」

財産を一族の困窮するものに分け与え、その生業を成り立たせ、結婚の仲立ちをした。地域の人が危難に遇うと財産を与えて救済した。そのために程夫人が亡くなったときには家には一年分の蓄えもなかったのである。

みずのとうし

かのえねずみ

程夫人は嘉祐二年四月癸丑に郷里で亡くなり、その年の十一月庚子に墓地に葬られた。享年は四十八であった。軾が朝廷に用いられたことから武陽県君の称号を贈られた。

けいせん

程夫人は六人の子を生み、長男の景先と三人の娘は早くに亡くなった。特に三女

は程夫人によく似ていて、学問にも通じていたが、十九歳で嫁ぎ先で亡くなった。

ああ、婦人が従順でその親族を仲睦まじくさせ、家の内をきちんとさせる知恵があれば、それで十分に賢いとされるだろう。まして、程夫人はその夫と子を発奮させ、教え導き、三人とも学識をもって天下に重んじられるようになったのだから、その見識の高さはとても真似のできないものがある。古の人は、国でも家でも、その興ると衰えるのに妻が関わらないことはないと言った。程夫人を見れば、古の人の言うことがますます信ずべきだと知れる。

その銘に曰く。

貧乏のときはその夫の名を汚さず、

裕福になってもその子孫に累を及ぼさず、

学問に努めることが一家の名を顕すことであると知っていた。

真直ぐに世に栄をなし、

夫を励まし、子を教え、

その光は大きかった。

しかし、その寿命はその徳に見合わなかった。

その余った福を子孫に施すということなのであろう。

——そっかあ、お母さんは48歳で亡くなったのかあ。自身には福が足りなかった分を子孫にまわしてということをし、最後に言っているんだけど、この部分も弟さんが提供した資料に基づいて書いたの？



司馬光は名作家として知られていましたから、さすがに最後のいわば「さび」

の部分は、ご自分の発想でみごとに書いて下さいました。

——こんなことを聞いていいのかわかんないけど、こういう文章を書いてもらったら、何か謝礼はするの？ 原稿料みたいな感じのものがあつたりしたのかなあ。

㊦ このような文章は、士大夫間の連帯意識のもとで頼んだり頼まれたりするもので、あからさまに原稿料をお渡しするようなことはありませんでした。何らかの形で感謝の意を伝えるということでありました。

ただし、家の箔付けのために著名な文章家に頼むようなときには高額の原稿料を提示することもあり、また、科挙に成功できなかった読書人が生活費を稼ぐために墓誌銘等の執筆に勤しむということもありました。社会が豊かになると、家

の歴史を調べて「族譜」をまとめたり、故人の事績を記録に残したりしたいと考える人が自ずと増えて来るので、そうした需要に応えることで官職に就けない読書人は収入を得ていたのです。

——それって、ボクが最初に就職したところの仕事と似ているかも。小さな出版社だったけど、経営が苦しくて、自伝の自費出版に活路を見出そうとしたんだ。「人には必ず1冊の本がある」というのが社長のいつものセリフで、人それぞれにきつと本に書くだけの価値のある一生があるという意味なんだけど、経営的には、みんなが1冊ずつ本を作ってくれたら、いくらでも仕事のタネがあるってことなんだけどね。

㊦

ついでに申しておきますと、ずっと後になって、私達兄弟が高い位に昇ったことから、我が父には七品官が追贈され、ようやく碣を建てられるようになりました。そこで張方平ちやうほうへいという人に墓表を書いていただきました。張方平は父の先輩であり恩人でした。

父がまだ無名であったときに、張方平が都から成都に赴任して来まして、その機会を捉えて、父はそれまでに書き溜めていた文章を携えて見せに行きました。

張方平は読むなり、

「そなたは是非とも都に上り、その才能を国のために役立てるべきだ」

と父に言ったのです。そして、都の人々に父を推薦する手紙を書いて下さり、そのお蔭で父は歐陽脩と知己になることができました。張方平は長命であったことから、大恩人に墓表を書いていただくことができたのです。

母のことに話を戻しますと、母が嫁いで来たときにいた祖母というのは、私の曾祖父の蘇杲の妻の宋夫人です。先に「族譜」について話をした折に、蘇杲の妻ははなはだ厳しい人だったと申し上げた通り、とにかく口のうるさい人であつたらしく、蘇杲の子の蘇序に嫁いだ史夫人は相当に苦しめられたようでした。

ここで母の実家についても少し触れておきましょうか。程の家の人達も何もかも悪かつたわけではありません。母の祖父を程仁霸ていじんはと言い、その事績を遙か後になつて私は次のように書きました。

公の諱は仁霸、眉山の人である。仁者で、郷里の人々に厚く信頼されていた。蜀の地が宋朝の統治下に組み込まれたとき、都の人々は遠くまで赴任するのをいやがり、そのために蜀では官員が不足した。そこで、地元の間人できちんと仕事

のできそうな者を選んで臨時の官職に就けた。公もその一人となり、眉山県の参軍という職に就いた。

盗賊を捕えるのが役目の尉じょうの職にある者が、ある盗人を掴まえた。盗みをしたのは確かで、たまたま持っていた刃物で誤ってその家の主人を傷付けてしまっていた。そこで、県尉はその盗人を、強盗殺人を繰り返す極悪人に仕立て、自分の手柄を大きく見せて褒賞を得ようとした。県尉は獄吏と組み、盗人に拷問を加えて目論見通りに白状させた。

県知事の判決がこれから下されるときに至って、盗人は役所の廊下で泣き続け、その衣がぐしょぐしょに濡れるほどであった。そこに公が通りかかり、話を聞いて、これは冤罪であると知った。

それで盗人に言った。

「おまえは、これは冤罪であると知事に訴えろ。そうしたら、私がどうかしてやる」

盗人が言われた通りにすると、公が脇から力を添えたので、知事はもう一度調べ直すよう命じた。

公は冤罪であると主張した。しかし、県尉と獄吏は徹底して争い、とうとう盗人は死刑になってしまった。そのために公は官職を失い、郷里に帰った。

それから一カ月の内に県尉も獄吏も急死した。

さらに三十余年後、公は白昼、そのときの盗人が庭先に座ってこちらを拝んでいるのを見た。盗人はこう言った。

「あっしはあれからずっと閻魔様の前で県尉と獄吏と白黒争ってまいりましたが、やつらはいまだに自分達の罪を認めようとしません。あっしはあなたさまのお越

しを待って決着を付けようと思っていました。閻魔様は早くにあなたさまを呼んで、結論を急ごうとしましたが、あっしは『我が恩人を驚かせたくない』と反対しました。しかし、今日に至ってあなたさまの御寿命が尽きることになりましたので、あっしはあなたさまを閻魔様のお裁き場へとお連れしたいと思えます。お裁きが終わりましたら、あなたさまは必ず天に昇られ、御子孫はきっと繁栄いたしましょう」

盗人は消え、公は見た通りを家の者に告げると、沐浴し、正装して横になり、そのまま亡くなった。

私蘇軾は幼いときにこの話を聞いた。そのときはすでに曾祖父は九十歳で亡くなっていた。

——それってホントの話？ 作り話だよね。

㊦ この話を聞かせてくれたのは、程仁霸の曾孫の程之元ていしげんでした。程之元はもちろん実際にあつた話だと信じていました。

いまわかりやすいように閻魔様と訳しましたけれど、昔の中国では、死後の世界も現世とほぼ同じ構造になっていて、その世界を統治する官僚機構があると考え、その役所を「地府」とか「冥府」とか呼んでいました。そのことと仏教が描く地獄とが結び付き、地府の長官を閻魔大王に見立てるようになりました。本当の閻魔様なら全てはお見通しで、わざわざ証人を呼んで調べるまでもないのでしようけれど、地府ではこの世の役所と同じように、原告、被告が証人を呼んで白黒争うようなことも行われたのでした。

中国では閻魔大王より閻羅王えんらおうと言う呼称が一般的で、現世で立派なお裁きをし

た人が死後に閻羅王になると考えられていました。大岡越前が閻魔様になるよう

なものです。閻羅王になったときされる代表的人物は、宋の時代の高級官僚だった寇こう

準じゅん

ほうじょう

はんちゆうえん

、包拯、そして范仲淹はんちゆうえんでした。寇準は私より75年先輩で宰相にまでなった

人、包拯は私より37年先輩で、私が鳳翔に勤めていたときに亡くなりました。

包拯はまさに大岡越前に似て、数々の名裁きの伝説で知られ、いまの中国におい

ても大変に人気があります。そして范仲淹は繰り返しお話しして来た「手本は范仲

淹」です。

現世ではたとえ理不尽な目に遭わされ、冤罪で死に追いやられたとしても、地

府では真実のお裁きが下り、悪人には地獄の責め苦が与えられ、その子孫にも罰

が下され、逆に勝った方には、死後の安楽と、子孫の繁栄が与えられると考える

ことで、虐げられることの多かった庶民はせめてもの慰めとしたのでした。必ず正しい裁きをすると民衆が絶大な信頼を寄せたのが宋の時代の3人だったのは、私が少なからず誇りとするところです。

——トバー君は閻魔様にはならなかったんだよね。トバー君は白黒はつきりさせる厳格さがなんとなくなさそうなもの。まあまあまあで、あいまいな感じで、みんながそこそこいいかなくてところにおさめてしまうような気がする。それに、死んでまでお役所で閻魔様としてのお勤めを堅苦しくするのなんかまっぴらだね。閻魔様にはならなかったから、こんなところでボクと飲んでパアパアくっちゃべっていられるんだよね。

㊦ 程仁霸の子に程文応ていぶんおうがいて、やはり長寿で八十五歳で亡くなり、その子に程

濬しんがいました。我が伯父と同時に科挙に合格した人です。我が母は程濬の妹です。

程濬に五人の息子がいて、長男が程之才ていしさい、次男が程之元でした。我が姉が嫁いだのが程之才でした。程之元と私は年齢が近く、従兄弟同士として、幼いときには梨や栗を拾い集めて一緒に遊ぶなどしていました。いまの曾祖父の話は10歳くらい頃に聞いたと思います。程之才とは子供心にもどこか気の合わないところがあつたのでしょうか、ほとんど付き合いませんでした。

さて、かつての勉強部屋の前で母のことを偲んでいたときに、程の家から使いの者が来たとの報せがありました。

「どうしたらよかろうか」

私は、程之元との誼よしみを思つて、一瞬だけ迷いました。

弟は断固とした口調で、

「論語にも『三年、父の道を改むる無くんば、孝と謂うべし』とあるではありませんか。100人の前で父上がおっしゃったことをいま変更するなどあり得ません」

「その通りだな」

ここはやはり父の定めに従おうと、使いの者は門の内には入れずに帰らせました。そして、程家の者の弔問は一切受けず、司馬光に書いていただいた墓誌銘を母の墓に納めたときにも、程の人間には誰一人としてそのことを知らせませんでした。程の家との絶縁状態は長く続き、和解に至ったのは遙か数十年後でした。それについては後々にお話することになるでしょうか。

——へーえ、なかなか厳しいものだったんだね。トーパー君も意外と厳格だったのかな、閻魔様にはならないまでも。

① 元の勉強部屋を見ると、そこは親類の者が居室として使っている様子で、かつてとはかなり趣が変わっていました。

「ここもよろしくないとしたら、どこがいいだろうか」

「あそこはいかがでしょうか。隅の竹林の陰にある草堂です。それなりの広さはあるのではないのでしょうか。あそこはきっと誰も使っておりませんでしょう」

「そうか、忘れていたが、言われてみると、一番ふさわしいのかも知れない」

2人で行ってみると、そのあたりは人の出入りがほとんどなかったようで、竹が密集して、草堂の存在をそっくり覆い隠していました。竹を分けて入り込み、

すっかり古ぼけた草堂の戸をがたがたと開けると、真っ先に感じられたのは、ふーんと黴臭さとともに、長年にわたって父が焚き込めていた香の匂いでした。

そこは、父が祖父に知られないようにしていた秘密の場所で、私達兄弟も滅多に立ち入ることがありませんでした。父はそこに張僊ちやうせんと言う仙人の画を飾り、何かあるとその画に向かって思うところを叶えてほしいと願っていました。茅將軍の像を破壊した祖父ですから、息子が妙な画を崇めていると知ったなら引き裂いてしまいかねないと、父は恐れていたのです。

——お父さんにはあやしげな信仰があったってこと？　へーえ、なんか意外だね。



父が張僊の画を手に入れたのは22歳のときでした。順に話すと、伯父が科

挙に合格したのは父が16歳のときで、そのころ父は学問には全く興味がなく、かといって商売で必ず身を立てようというまでの思いはなかったようで、何となくふらふらしていました。19歳で結婚し、一応独立して家を構え、商売でそれなりに儲けたかと思うと、何かわけのわからないことに使ってしまう、ふいと家を出るとそのまま何カ月も帰って来なかつたりしていました。

20歳で長女が生まれましたがすぐに死んでしまい、果たしてこれから自分は何をしていったらいいのか真剣に思い悩み、22歳のときに成都に行った折に、自分の運勢を占ってもらおうと思いつきました。玉局観ぎょくくわんという道教の寺院むにがいしし礙子がいしという占いの先生がいてよく当たるとの評判を聞き、そこを訪れました。占い師の小屋を見つけ、中を覗くと、奥に掛けてあった画が目飛び込んで来ました。父はその画に魅入られたかのように、ふらふらと歩み、そのまま画の前で立ちす

くんでしまいました。

玉局観はそのころの有名な大寺院で、以前に、道教の教派の一つである五斗米道ごとうまいどうの始祖に張道陵ちやうどうりやうりやうという人がいて、蜀の人々の大変な信仰を千年にわたって集めて来たという話をしましたけれど、**第4回**、その張道陵が老子から道教の奥義を教わったとの言い伝えのある場所に建てられたのが玉局観でした。

「お若い方、いまそなたは、大切な何かを得たいと激しくお悩みでありましょう」

父の背後で声がしました。占いの先生でした。

父は胸の内を見抜かれようと感じ、

「おっしゃる通りです」

画を見つめたまま答えました。

「大切な何かを得たいと切実に思っても、そなたにはそれが何であるかがわから

ないので、悩みを解決する糸口をどこに見出したらいいのかさえも見当がつかず
にいます。悩みはいよいよ深まるばかりで、心が焼け焦げるかのようでありまし
よう」

「まさにおっしゃる通りです」

「その画に出会えたのは、そなたにとってこれ以上ない幸い。その画に向かっ
て毎日欠かさずに祈るならば、必ずそなたの悩みがするするとほどける日が来て、
その後にそなたの求める大切な何かが知れ、さらにはそれが得られるようになり
ましょう」

「ここに描かれているのは誰なのでしょうか。筆に不思議な力があるようで、一
目見てここから離れられなくなってしまうました」

「これは張僊様のお姿にございます。実際に張僊様にお会いしたある人がそのお

姿のままに描いたと言われています」

張僊は張道陵の子孫とされ、宋よりも少し前の時代から庶民の信仰の対象になっていた。つていました。

父は何としてでもその画がほしくなり、占いの先生と交渉した結果、商売の種として使おうとしていた玉環と交換して家に持ち帰りました。毎度のこととは言え、元手をなくして訳のわからない画を携えて帰って来た父に、母はきつと呆れたことでありしよう。

父は秘密の小屋を建てて画を飾り、毎朝、香をたいて、その画に祈り続けました。それから3年して、父は何かに打たれたかのように学問に突如として目覚めたのでした。結果としては、占いの先生が言った通りになったわけで、父はことのほか張僊の画を大切にしていたのでした。

——その画のお蔭でまことに結構でありましたってことでいいんだろうけど、いまの話を書く限りでは、占いの先生はお父さんの悩みを別に言い当ててはいないよね。若い人なら、たいていなんかしらよくわからない悩みがあつて、だから占いの先生の小屋に入ってみようとしたりするんだよね。その先生は、もしかしたら、その前にも同じようにして画を売りつけていたりしたんじゃないのかなあ。つまり、靈感商法つてやつだ。

① 私は怪しげな靈力を信じるものではありません。庶民をたぶらかすまやかしの信仰は、祖父と同様に打ち砕くべきだと思っていました。それでも、父が思いを寄せていた張僊の画を尊重し、広さもちょうどよかったので、その草堂に棺を

運び込むことにしました。

二つの棺を画の前に安置し、かつて父がしていたように画に祈りを捧げました。この世にあつて父の思いを叶えてくれたように、彼の世においても、父の望むようであるようにしてほしいと祈りました。そして、我が妻も父に同行して彼の世において安樂が得られるようにと祈つたのでした。

さて、今夜はかなり話が長くなつたようです。まだ郷里に着いた一日目で、郷里の人々についてまだまだ語りたい思いがありますが、これくらいにしておきましょう。もしかしたら、私の距離への思いばかりが先行して、あなたにとっては興味の湧かない話であつたでしょうか。

——そんなことはないけど。これでトバー君の故郷やらご先祖様について、い

ろいろ知ったわけだけど、ボクが話せたのはあやふやな河童徳利の話だけだったよなあ。それも、なんの思い入れもなしでね。故郷っていうのはなんなのか、ちつとは考えないといけないのかもね。

* * *

イノ君が住む町、それはわたしが住む町でもあるのだけれど、何がこの町の特色であるのかというと、最もわかりやすいのが海があるということだろう。日本は島国で長い海岸線に囲まれているから、海のある町は数えきれないほど日本にはたくさんある。そのなかで、あえて海が特色だというのは、海以外に際立ったものがないということでもあるのだろう。鎌倉にも海はあるが、古都としてのより強烈な特色がある。とはいえ、海を重要な背景とする歌を作詞、作曲し、自ら

それを歌う人、それもかなりメジャーな2人が我が町から出ているのであるから、海のある町として我が町を捉えるのにはそこそこ理由があるといえるだろう。

時間と波があれば海に入っているイノ君が、海を特色とするこの町を故郷として実感していないというのは不思議な気がする。勝手な推測をすれば、イノ君はこれまでに世の中になじめないことをいくつも経験してきたからだろうか。その経験のほぼすべてがこの町であったのだ。そういうことなのかと本人に問えば、素直なイノ君はきつと何かよくわからない理由を挙げて否定するだろう。

それとは別に、イノ君が故郷について河童徳利以外に語れることがないといったことには、わたしもいくらか関係している。イノ君の叔父として、わたしに故郷や先祖について知ることがあれば語るべき立場にある。わたしはそうしたことをほとんどしてこなかった。

戦争体験を語り継ぐことが大切だと、とくに8月になるとさかんにいわれる。戦争を実際に体験した人々の高齢化が進み、直接にその体験を聞くことが今後はいよいよ困難になる。だから、戦争体験者の話を聞いたことのあるたとえばわたしのような世代が次に語り継いで行くことがこれから大切になるといわれる。その重要性をわたしは否定するものではない。しかし、当事者ではなく伝言役として語るのでは、迫真性に著しく欠けるのは避けようがない。

故郷について、あるいは先祖について語るのも同じような難点がある。ジョン・クレアの羊飼いが先輩たちについて語り、聞き手が耳を傾けるのは、語り手が伝統の上しっかりと立っているからだろう。蘇東坡もはつきりと伝統を意識して語っている。わたしにはその意識がない。だから語るのをためらってしまふ。

それでいながら、元来縁もゆかりもない昔々の中国を舞台にした小説を書く

いふのはどのような意味合いからくるのだろうか。もしも問われたならば、イノ君以上によくわからない理由を並べなければならなくなるだろう。